

20. 感染症情報センター

センター長 岡部信彦

概 要

平成9年4月国立予防衛生研究所は「国立感染症研究所」と名称変更になり、それまでの感染症疫学部は発展解消し「感染症情報センター（初代センター長・井上栄博士）」が発足した。主な機能は、1) 感染症サーベイランスデータの集計、感染症情報の収集、解析、その情報の国民への提供、2) 外国の感染症機関との情報交換、3) 感染症集団発生の疫学調査、およびそれを実行する専門家の養成、4) 感染症予防制圧戦略の研究および提言 5) 不明病原体に関する検索並びに研究、技術伝達、等である。

平成11年4月に施行された感染症法では、サーベイランスシステムの強化が示されている。同法に基づいた基本指針の中には患者発生状況サーベイランスと同様に病原体に関する情報の収集、分析及び提供と公開も必要であるとされている。指針をふまえた局長通知では、感染症発生動向調査事業の実施について述べられている。その中には国立感染症研究所に中央感染症情報センターを、地方感染症情報センターを各都道府県等域内に1カ所設置することが述べられ、それぞれの役割が記されている。

感染症情報センター(IDSC)は、国のサーベイランス事業の中で中央感染症情報センターとして位置づけられ、地方感染症情報センターならびに都道府県等の協力を得て、感染症法に規定された1-4類感染症(平成15年11月1-5類に類型が変更された)を中心としたサーベイランスを行っている。病原体情報については WISH Net, IDSC ホームページ(<http://idsc.nih.go.jp/index-j.html>)、病原微生物検出情報(IASR)を中心として、疾患の発生動向については感染症週報(IDWR: Infectious Disease Weekly Report)などを中心として、収集された情報の迅速な還元と公開を行っているところである。血清疫学調査としては、感染症流行予測調査事業の中でこれを行っている。このデータ等を基礎とし、感染症対策の重要な一角としての予防接種のあり方についてのエビデンスを求めることも IDSC の重要な業務である。

感染症発生への適切な対応の一環として実地疫学の重要性が理解されつつあるが、これにかかわる人材の育成は急務である。感染研では業務の一つとしてこの人材教育(実施疫学調査専門家養成コース(FETP))が行われているが、研修実施の主体は IDSC が行っている。

また平成14年4月より感染症情報センター5室、6室が新設され、5室においては細菌、6室においてはウイルスについて、自治体における病原体検査の研修等を行い、また病原体検査に関する情報の収集、検査法の開発等を行うようになり、軌道に乗っている。なお5室6室の業務は村山庁舎で行っている。

情報センターは現在以下の6室で分担し、業務研究を行っている。

第一室 (感染症対策計画室)

国内外における感染症の流行、集団発生・異常集積時の疫学調査、感染症対策のための計画立案とそのための研究などを行っている。ことに積極的疫学調査、これに関わる感染症実地疫学専門家(Field Epidemiology Training Program)の養成を行っている。

第二室 (感染症情報室)

地方感染症情報センターならびに都道府県等の協力を得て国内感染症サーベイランスデータの収集・分析、及びその結果の還元と提供及びそのための研究を行っている。情報の還元・提供は、感染症情報センターホームページ、感染症週報(Infectious Disease Weekly Report: IDWR- ホームページにて週単位の発行)、病原体微生物検出情報(Infectious Agents Surveillance Report: IASR- ホームページ及び印刷物として月単位の発行)及び年報告をCDROM版などにより、感染症・公衆衛生関係の専門家、医療・保健行政担当者及び一般国民に対して広く行っている。

第三室 (予防接種室)

感染症発生動向調査事業の一環として行われている血清疫学調査の立案と実施、現行予防接種の効果と副反応に関するモニタリング、これらの結果の公表と広く一般への情報提供、予防接種対象疾患の感染症として人に与える影響(disease burden)に関する調査研究、及び今後の我が国における予防接種の有用性に関する総合的研究を行っている。また感染症研究所として行われている国内血清銀行の管理を行っている。

第四室 (病原診断室)

他の部の所管に属さない病原体に関すると思われる原因不明疾患の微生物学的検査、レファレンス、病原診断のための方法の開発を行っている。

第五室 (細菌研修室)

細菌性疾患の検査に関する情報の収集・解析、情報提供を行っている。また国内外の関連機関と連携し、公衆

感染症情報センター

衛生における細菌検査の技術向上・標準化等を支援している。公衆衛生に携わる公的機関の職員を対象に細菌検査に関する講習の立案・遂行、新規検査法の研究などを行っている。

第六室（ウイルス研修室）

ウイルス性疾患の検査に関する情報の収集・解析、情報提供を行っている。また国内外の関連機関と連携し、公衆衛生におけるウイルス検査の技術向上・標準化等を支援している。公衆衛生に携わる公的機関の職員を対象にウイルス検査に関する講習の立案・遂行、新規検査法の研究などを行っている。

各室の業務、研究、作業は、独立した個別のテーマもあるが、その多くは各室のスタッフが、それぞれが重なり合い、協力し合いながらテーマ別に集合して取り組んでいることが多い。したがってそれぞれの業務研究行政等について各室別に業務研究内容表すのではなく、今年度は以下のような項目に分類して、情報センターのこの1年間の活動内容を記した。

- I. 感染症発生動向調査事業の実施および情報の還元
- II. 感染症発生動向システムの改善
- III. 感染症発生動向調査事業に関する応用研究・業務
- IV. 感染症危機管理対策、集団発生・広域流行への連携および対応に関わる事業・研究
- V. 感染症危機管理およびそれに関わる人材養成（実地疫学専門家養成プログラム）に関する業務
- VI. 感染症の疫学等の研究
- VII. 予防接種、薬剤等に関連した研究・業務
- VIII. 病原体の病態および診断に関連した研究
- IX. 電話、メールによる問い合わせ・メディアへの対応業務、その他

その詳細については以下それぞれの項目別に記されている。

平成14年3月より新たな感染症SARSがアジアを中心に世界的な拡がりを見せた。我が国においてもその対応に追われたが、感染症情報センターは発足以来の経験および各方面との交流を生かし、新たな疾患に対する情報の収集、分析、情報提供を行い、国内外での現場における疫学調査協力と対応への協力、国内の行政対応・医療現場での対応への協力、国際的対応への貢献と協力などを広範に行った。全体からみれば決して十分とはいえないが、情報センターは常勤スタッフ、非常勤スタッフ、FETPグループなど総動員でこれに当たり、現有能力の100%以上を発揮し相当の役割を果たしたと自負してい

る。またこれをきっかけに主任研究官6名の増員が認められたが、これらの経験とスタッフの増加は、平成16年に入りアジアを中心に世界的に流行した、家禽類を中心とした鳥インフルエンザの発生とベトナム・タイでの人感染例の発生、そして我が国での養鶏場などでの鳥インフルエンザの発生および人感染の懸念に対する調査、研究、対応に生かされた。

なお岡部センター長は以下の委員の委嘱を国より受け、情報センター業務・研究の結果、成績などを背景として国における感染症対策の検討に参画した。

厚生省労働省健康危機管理調整会議委員

厚生労働省厚生科学審議会臨時委員

（感染症分科会員）

厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員

（医療機器・体外診断薬診断部会員）

厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員

（食中毒部会員）

厚生労働省疾病・障害認定審査会臨時委員

（感染症・予防接種審査分科会員）

厚生労働省厚生科学審議会生活環境水道部会委員

厚生労働省疾病・障害認定審査会委員

（感染症・予防接種審査分科会員）

内閣府食品安全委員会専門委員

（肥料・飼料等専門調査会委員

緊急時対応専門調査会専門委員）

農林水産省食料・農業・農村政策審議会臨時委員

情報センターにおける平成15年度の常勤スタッフの人事異動は以下のものであった。

平成15年4月厚生労働省情報管理専門官進藤義宏が着任。

平成15年7月感染症情報センターリサーチレジデント（HS財団）より重松美加、同年8月大阪大学経済学部より大日康史、同10月東京大学医学部第一外科学教室より森兼啓太、平成16年3月米国疾病予防対策センター（CDC）予防接種プログラム部門より田中政宏が、それぞれ主任研究官として着任。

平成15年9月感染研ウイルス2部より田中幸江が情報センター主任研究官に配置転換。

平成15年3月小坂健主任研究官が厚生労働省老人保健課へ、江頭圭三主査が国立精神神経センター精神研究所へ異動。

WHO ジュネーブ本部感染症サーベイランス・対応部門出向中の進藤（鈴木）奈邦子は、継続して滞在。

業務・研究業績

I. 感染症発生動向調査事業の実施および情報の還元

1. 感染症法に基づく感染症発生動向調査

厚生労働省感染症発生動向調査事業として、全国からの患者発生報告を集計処理し、各都道府県へのデータ還元を行った後、全国集計データをダウンロードし、データ変換の後エクセルへの読み込みを行い、時系列解析、地理的解析などを行った。さらには、必要に応じてFETPより地方感染症情報センターへの問い合わせを行い、それらの結果を総合してコメントを作成し、表とグラフの作成も行い、ホームページ上での情報還元を行った。また、重要事項については厚生労働省結核感染症課へも情報提供を行った。[岡部信彦、木村幹男、谷口清州、多田有希、小坂健、橋戸円、重松美加、FETP 研修生、江頭圭三、大竹由里子、松岡静香]

2. 病原体情報の収集と月報・年報の作成

病原微生物検出情報事務局において、病原体情報センター業務として、オンラインによる報告票の収集、電算機処理、情報ファイル作成、作表、月報および年報の作成、配布に関する一連の作業が継続的に実施された。

(1) 情報処理：2003年1月～2003年12月の検出病原体報告数は、病原菌については、地研・保健所 10,083、検疫所 1,706、都市立感染症指定医療機関 539 であった。ウイルス（リケッチア、クラミジアを含む）に関しては 15,596 件の検出報告をうけた。

(2) 月報の編集：本年度中に病原微生物検出情報月報が 12 号（第 24 巻）および第 24 巻索引が編集・発行された。

また、インターネットを介して毎月、病原微生物検出情報が国内外に提供された。

(3) 年報の編集：病原体情報に関する年報は、欧文による 1999 年年報が、Japan J. Infect. Dis., 2000 Vol. 53 Supplement として編集・発行された。[山下和予、齊藤剛仁、赤塚昌江、加藤信子、野地元子、徳永真里子、木村幹男、岡部信彦]

3. 感染症疫学情報の解析に基づく特集記事の作成

毎月 1 回の編集委員会で、特定の感染症を患者発生情報と病原体情報の両面から分析し、「病原微生物検出情報」の特集記事を作成した。掲載された記事は、2003 年 4 月号：アメーバ赤痢、5 月号：流行性耳下腺炎、6 月号：腸管出血性大腸菌感染症、7 月号：日本脳炎、8 月号：サルモネラ症、9 月号：HIV/AIDS、10 月号：SARS、11 月号：

インフルエンザ、12 月号：ノロウイルス、2004 年 1 月号：感染症法改正、2 月号：デング熱、3 月号：麻疹である。

[山下和予、齊藤剛仁、赤塚昌江、加藤信子、徳永真里子、野地元子、木村幹男、多田有希、岡部信彦、谷口清州、重松美加、多屋馨子、伊藤健一郎、西尾治、井上栄、渡邊治雄（細菌第一部）、寺嶋淳（細菌第一部）、泉谷秀昌（細菌第一部）、倉根一郎（ウイルス第一部）、岸本寿男（ウイルス第一部）、高崎智彦（ウイルス第一部）、宮村達男（ウイルス第二部）、田代真人（ウイルス第三部）、小田切孝人（ウイルス第三部）、荒川宜親（細菌第二部）、新谷三春（細菌第二部）、遠藤卓郎（寄生動物部）、野崎智義（寄生動物部）、小林睦生（昆虫医科学部）、神山恒夫（獣医科学部）、佐多徹太郎（感染病理部）、石井則久（ハンセン病研究センター）、石川直子（国際協力室）、山本茂貴（国立衛研）、奥村二郎（企画主幹）、倉田毅（副所長）、吉倉廣（所長）、中里栄介（厚生労働省）、河村成彦（厚生労働省）、金井要（厚生労働省）、黒野健司（厚生労働省）、浅沼一成（厚生労働省）、中嶋健介（厚生労働省）]

4. 感染症週報の発行

平成 11 年 4 月施行の「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」、および平成 15 年 11 月施行の一部改正の主旨のもとに、感染症週報の発行を継続しており、当感染症情報センターのホームページ上に PDF 版と HTML 版とで掲載している。

感染症週報には「発生動向総覧」以外に、「注目すべき感染症」としてその時々で問題となる感染症を 1～2 件取り上げ、詳細な解説を行い、「病原体情報」として、その時々で問題となる感染症の患者からの病原微生物検出状況を掲載している。

また、「速報」においては、主に地方衛生研究所から投稿される、国内で問題となったアウトブレイクに関する最新の記事などを掲載し、成田空港検疫所の協力で「海外感染症情報」のコーナーを設けて、最新の海外感染症に関する記事を紹介し、「感染症の話」においては所内外の協力を得て、感染症法に規定された疾患、あるいはそれ以外の疾患も取り上げて解説を行い、「読者のコーナー」においては、外部からの問い合わせのあった質問につき、掲載する価値があると判断されたものを多くの読者にも公開している。[岡部信彦、木村幹男、多田有希、小坂健、谷口清州、多屋馨子、重松美加、齊藤剛仁、菊池 均（成田空港検疫所）、石井俊也（成田空港検疫所）、大竹由里子、松岡静香]

5. 感染症発生動向調査事業年報 CD-ROM 版データ集（2002/1-2002/12）の発行

感染症法が施行されてからの感染症発生動向調査の確

定データを迅速に還元するためには、時間のかかるコメントの作成を最小限にしてデータ集の形で発行するのが望まれる。このため、利用者がデータ処理をできるようにエクセルの表を中心として収録した CD-ROM 版(2002/1-2002/12)を平成16年3月に発行した。疾患の詳細分類、推定感染地毎の分類を行い、さらに新たにデータの経年変化を追加するなど、内容の充実を図った。

[岡部信彦、木村幹男、谷口清州、多田有希、多屋馨子、小坂健、重松美加、FETP 研修生、加藤信子、進藤義宏、江頭圭三]

6. インターネット等による病原体情報の提供

- (1) 病原体情報報告機関に対して、速報を還元するために主要病原体の動向を WWW-WISH の電子会議室の病原体情報フォーラムにアップロードした。また WWW-WISH の個別情報システムによる還元情報速報閲覧のために新しいデータのアップロードを毎日行った。
- (2) IDSC ホームページの「病原微生物検出情報」のページに、オンラインで随時報告されるデータの追加・変更を反映させた速報グラフを更新・掲載した。地方衛生研究所などからの速報記事を随時掲載した。また、累積データに基づく統計表とグラフおよび病原体名、疾病名から検索できる月報特集記事索引を毎月作成し更新・掲載した。
- (3) インフルエンザシーズン中、ウイルス第三部へのインフルエンザウイルス情報の転送と、WHO の FluNet への日本の週別型別分離数データのアップロードを毎週行った。
- (4) 地方衛生研究所と検疫所の検査情報担当者メーリングリストを整備し、毎月の予定についての連絡、バージョンアップやインフルエンザ検査担当者や SARS 検査担当者への連絡に活用した。[齊藤剛仁、赤塚昌江、徳永真理子、野地元子、加藤信子、山下和予]

II. 感染症発生動向調査のシステムの改善

1. 感染症検査情報収集還元オンラインシステムの改良

平成12年1月より運用を開始した感染研-地研-検疫所間の感染症検査情報(病原体情報)コンピュータオンラインシステム Version4 について、不具合修正と機能追加のためプログラムの改善を行った。検出病原体コードの追加・修正および2003/04 インフルエンザシーズン用抗血清コードを追加した Version4.60 を平成15年10月に、さらに感染症法改正に暫定的に対応するため検出病

原体コード、診断名コードなどを追加修正した Version4.61 を平成16年1月より運用開始した。[山下和予、齊藤剛仁、徳永真理子、加藤信子、赤塚昌江]

2. 感染症法改正に関する技術的支援

感染症法の5年目の改正に関して、サーベイランス技術ワーキンググループの事務局として、サーベイランス対象疾患の評価と見直しを行い、また、実際のサーベイランスシステムの運用上の評価を行い、必要な改善点につき、厚生労働省に対して、技術的な支援と助奨を行った。[岡部信彦、谷口清州、木村幹男、重松美加、森兼啓太、大日康史、小坂健、多田有希、新井智、大山卓昭、砂川富正、FETP 研修生4期&5期]

3. 赤痢菌の同定検査の問題点についての緊急アンケート

平成15年度の衛生微生物技術協議会で、他の菌が赤痢菌と誤同定される事例が報告されたことから、赤痢菌検査の実態と問題点を明らかにするためアンケートを実施した。内容は誤同定の件数・推定原因、地方衛生研究所でのチェック体制、現場(病院・検査所・保健所)との連携等である。オンラインシステムによって細菌検出情報が寄せられている地研71施設に送付し、全てから回答があった。

(1) 簡易同定キット・全自動同定機では赤痢菌の鑑別は困難なこと、(2) 赤痢菌を経験している機関が少ないこと、(3) 遺伝子診断が導入されていないことから、赤痢菌と同定した場合はすべて地研に送って確認するのが妥当と思われた。

菌株送付の根拠については保健医療局長通知(1999年3月31日付)[感染症発生動向調査実施要領]が一番の根拠となっているが、現在の通知では不十分であることが浮かび上がった。「可能な範囲で」の文言を通知からははずすだけでは周知徹底されないので、行政・検査機関・保健所・地研の役割を明らかにした新しい通知の必要がある。

[山下和予、吉川昌江、野地元子、齊藤剛仁、伊藤健一郎、岡部信彦、寺嶋淳(細菌第一部)、廣瀬健二(細菌第一部)、渡邊治雄(細菌第一部)]

III. 感染症発生動向調査事業に関する応用研究・業務

1. サーベイランスシステムの改善に関する研究

厚生労働省新興再興感染症研究事業として「効果的な感染症発生動向調査のための国及び県の発生動向調査の方法論に関する研究(主任研究者 谷口清州)を組織し、感染症サーベイランスの在り方について研究を行った。

[岡部信彦、谷口清州、木村幹男、多田有希、山下和予、橋戸円、大山卓昭、砂川富正、小坂健、重松美加]

2. 感染症発生動向調査に基づく注意報・警報システムおよび全国罹患数推計に関する研究

全数報告疾患のうち2類および4類の一部について、1999年4月から2003年12月までの報告情報の解析を行い、感染症学会、国際旅行医学会などで発表し、情報の還元および今後の改善課題について検討した。[小坂健、重松美加、谷口清州、永井正規（埼玉医大）]

3. バイオテロ対策に係わる業務

世界保健機関、あるいはG7+メキシコと協力しながら、バイオテロ、特に天然痘に関する対応方針を作成するに当たり、国際会議において各国の情報を収集議論し、厚生労働省に技術支援を行い、本邦におけるガイドラインの作成、あるいは研修会への協力を行った。[谷口清州]

4. 感染症発生動向調査、話題の病原体、海外感染症情報、旅行医学、SARS・鳥インフルエンザ関連緊急情報、インフルエンザキャンペーンなどのインターネットホームページのへの掲載、更新、維持

感染症発生動向調査の解析結果、時系列グラフ、地図グラフおよびHTMLファイルを作成してホームページ上にアップロードし、定期的に更新、維持管理を行った。話題の病原体、海外感染症情報、旅行医学、SARS・鳥インフルエンザ関連緊急情報、およびインフルエンザキャンペーンなどのページについても内容を検討し、HTMLファイルの作成、維持管理を行った。[大竹由里子、松岡静香、小坂健、重松美加、森兼啓太、加藤信子]

5. 海外感染症情報の収集と評価

WER (WHO)、MMWR (米国 CDC)、Eurosurveillance Weekly (EU)、CDR Weekly (英国)、SCIEH Weekly Report (スコットランド)、CDI (豪州)、Lancet、N. Engl. J. Med.、J. Infect. Dis.、Clin. Infect. Dis.、J. Travel Med. などや、電子メールでのProMED、Outbreak Verification List (WHO、参加機関のみ) やTravelMed (国際旅行医学会、会員のみ)、あるいは、その他種々のウェブページ上での感染症情報を収集・評価し、必要な情報を関係機関に提供した。[岡部信彦、木村幹男、谷口清州、多屋馨子、多田有希、新井智、小坂健、重松美加、森兼啓太、大日康史、田中政宏、大山卓昭、砂川富正、齊藤剛仁、FETP 研修生4期&5期]

6. 食品と微生物におけるリスクアセスメント

腸炎ビブリオ感染症と魚貝類におけるリスクアセスメントについてWHO、FAO共同プロジェクトの中で草案グル

ープの専門家として日本のデータ収集、提供及び草案を作成した。[小坂健、春日文子（国立医薬品食品衛生研究所）]

7. 性感染症（STD）発生動向調査の評価と解析

現行のSTD発生動向調査に関して、定点の妥当性等を含め、その信頼性を調査研究するとともに、わが国の近年のSTDの最近の動向を解析した。[橋戸円、小坂健、中瀬克己]

8. 院内感染対策サーベイランス事業の支援

厚生労働省事業として行われている「院内感染対策サーベイランス」を支援する厚生科学研究費補助金「薬剤耐性菌の発生動向のネットワークに関する研究」内の分担研究班:「院内感染サーベイランスにおける解析結果の還元・提供に関する研究」および「手術部位感染症における効果的な感染症発生動向の把握と感染症リスク因子解析に関する研究」に対して横断的に担当し、解析結果のフィードバックに関するアンケート調査や、入力支援・データ提出・解析・フィードバックの流れを一元的に管理できるソフトウェアの開発に参画した。[森兼啓太、谷口清州、岡部信彦、荒川宜親（細菌第2部）、小西敏郎（NTT 東日本関東病院）、針原康（同）、システムプランニングコーポレーション株式会社、黒野健司（厚生労働省医政局指導課）、溝口達也（同）]

IV. 感染症危機管理対策、集団発生・広域流行への連携および対応に関わる事業・研究

1. 院内感染アウトブレイクへの対応に関する研究

厚生労働科学特別研究事業「医療機関における院内感染対策の基盤整備に関する緊急特別研究」において、医療機関における院内感染のアウトブレイクへの対応・連携や調査方法に関する研究を行った。当センター（FETP）の対応事例や文献調査およびアメリカ疾病制御予防センター（CDC）での対応方法の聞き取り調査による情報収集ののち、院内感染アウトブレイク時の対応に関する指針を作成した。この指針は、各医療機関の日頃の備えとして、また保健所などが各医療機関からの援助要請への対応に関する備えとして、有用であると考えられる。また、アウトブレイクの早期察知に役立つ日常の院内感染サーベイランスに関するアンケート調査も行った。[森兼啓太、上野久美、砂川富正、大山卓昭、中島一敏（大分大学）、安井良則（大阪府堺市保健所）、神谷 元、横田恭子（聖路加国際病院）、西岡みどり（国立看護大学校）、戸谷真理子、谷口清州、岡部信彦]

2. 院内感染発生時の報告に関する研究

厚生労働科学特別研究事業「国、自治体を含めた院内感染対策全体の制度設計に関する緊急特別研究」において、「生物別、感染部位別院内感染発生時の報告のあり方に関する研究」分担研究班に参画し、病原体特異的な院内感染アウトブレイクの定義づけや報告に関する提言を作成した。[森兼啓太、大久保憲 (NTT 西日本東海病院)、小林寛伊 (NTT 東日本関東病院)]

3. インフルエンザ流行期におけるインフルエンザ総合対策 (強化サーベイランス、電話、メール問い合わせおよびウェブ情報の提供)

厚生労働省インフルエンザ総合対策の一環として、インフルエンザの発生動向調査に基づく注意報警報システム、インフルエンザ様疾患の迅速報告システムと死亡報告システムを運用、解析、情報提供するとともに、インフルエンザのQ&Aを更新し、医療従事者以外の要望の強い情報も提供した。また、本年より、インフルエンザホットライン業務は医療関係者および地方行政関係者を対象とし、12月から3月までの平日日中時間帯に実施した。[岡部信彦、谷口清州、多屋馨子、重松美加、森兼啓太、大日康史、松岡静香、木村幹男、小坂健、多田有希、新井智、荒木和子、大山卓昭、砂川富正、FETP 研修生4期&5期]

4. SARS に対する情報収集と対策

2003 年第一四半期を中心にアジアの国々で大流行した新興感染症、SARS に対し、2003 年末から 2004 年にかけての再流行が懸念された。日本で SARS 患者が発生した際の公衆衛生的初期対応や、集団発生を想定した院内感染対策などを立案した。WHO、CDC を始め各国が随時発出する情報を常時監視し、適宜日本語に翻訳するとともにそれらを対策立案に反映させた。情報センターのホームページには、医療従事者のみならず国民からのニーズの高い「SARS に関する Q&A」や、医療従事者・病院管理者・公衆衛生部局向けとなる「SARS に対する公衆衛生的対応および院内感染対策」などの文書、および前述の翻訳文 (約 200 文書) を掲出し、広く情報提供に努めた。また、流行間期には事前対応型対策の一環として、「非流行期における SARS 対応のガイドライン」をウェブ上に発表した。リスクコミュニケーションとして、情報センター長を中心に、報道機関への連日、あるいは毎週のブリーフィングを行い、社会への正確で、迅速な情報の提供と、科学的知識の普及に努めた。また、厚生労働省、地方自治体や医師会、病院などの要請に応じて、地域での SARS 対策講習会に講師を派遣して、地域での対策に協力した。[重松美加、森兼啓太、大日康史、小坂 健、多田有希、松岡静香、新井智子、上野正浩、上野久美、増田和貴、島

田靖、逸見佳美、森伸生、吉田英樹、砂川富正、中島一敏 (大分大学)、大山卓昭、木村幹男、多屋馨子、谷口清州、岡部信彦]

5. トリインフルエンザの汎アジア的発生に対する情報収集とヒト流行への予防的対策

2003 年末から 2004 年にかけて日本を含むアジアの国々でトリインフルエンザ (H5N1) が発生した。ヒトへの感染が確認されたタイ・ベトナムを統括する WHO から現地情報収集・解析にあたるスタッフ派遣の要請があり、これに応じて約 1 ヶ月づつ 3 名を WPRO へ派遣した (上野正浩、上野久美、増田和貴)。また、WHO や各国衛生主管部局より発せられる情報の整理を行うために 1 月初旬から 3 月中旬まで毎朝ミーティングを持ち、スタッフ間の情報共有に努めた。必要な情報は日本語に翻訳して情報センターのホームページに迅速に掲出し、国民の情報ニーズに対応することができた。また、SARS 同様に、定期的なメディア・ブリーフィングを実施し、リスクコミュニケーションの向上を図った。並行して、日本でトリインフルエンザのヒト感染が発生した際に備えた初期対応マニュアルや、大規模な感染を想定したガイドライン策定を行った。[重松美加、森兼啓太、大日康史、上野正浩、上野久美、増田和貴、島田 靖、逸見佳美、森伸生、吉田英樹、砂川富正、中島一敏 (大分大学)、大山卓昭、谷口清州、岡部信彦]

6. 国際的感染症集団発生事例に対する調査協力

香港における重症急性呼吸器症候群の流行に対して、世界保健機関の要請を受けて、メトロポールホテルでの感染拡大、院内感染事例、およびアモイガーデンにおける集団発生に対して、調査協力を行った。[砂川富正、中島一敏 (大分大学)]

重症急性呼吸器症候群の中国での 2003 年の集団発生事例に対し、世界保健機関西太平洋事務局からの要請を受けて、院内感染対策、疫学調査手法、サーベイランス、検査室におけるバイオセーフティ対策について、北京市および広西チワン自治区での調査協力を行った。[重松美加]

V. 感染症危機管理およびそれに関わる人材養成 (実地疫学専門家養成プログラム) に関する業務

1. 感染症危機管理およびそれに関わる人材養成 (実地疫学専門家養成プログラム) に関する業務 (1) 全般実施状況

FETP の実施は 5 年目となり、平成 15 年 9 月 3 期生 1 名 (鈴木里和)、平成 16 年 3 月 4 期生 (島田靖、逸見佳

感染症情報センター

美、森伸生、吉田英樹）が研修終了した。平成 15 年 4 月、5 期生 3 名（上野久美、上野正浩、増田和貴）を迎えた。また平成 13 年度から Dr. John Kobayashi（Washington University, 米国）に長期コンサルタントを依頼し、感染症疫学研究、地方自治体との積極的疫学調査などが充実した。

(2) 感染症集団発生事例に対する実地疫学調査協力

平成 15 年度において、実地疫学専門家養成プログラム（FETP）は、以下の感染症集団発生事例に対して、地方自治体からの要請を受けて、調査協力を行った。

- 学童を中心とした麻疹集団発生事例（宮崎県都城市）
- SARS 感染台湾人医師についての事例（大阪府大阪市）
- 成人麻疹集団発生事例（長野県長野市）
- 施設内細菌性赤痢集団発生事例（東京都足立区）
- 無菌性髄膜炎・脳炎集積事例（兵庫県伊丹市）
- 施設内病原性大腸菌 O157 感染症集団発生事例（福岡県福岡市）
- 鳥インフルエンザ拡大予防事前対応（京都府）

(3) 研修活動

FETP のトレーニングの一環として、初期導入研修（John Kobayashi ; 4 月）とともに、熱帯感染症および旅行医学（Robert Steffen ; 6 月）、国際的なインフルエンザ予防対策および SARS 対応（Timothy Uyeki ; 7 月）、バイオテロリズム事前対応および大規模感染症対応事例（Michael Bruce ; 8 月）、予防接種対象疾患の予防対応の実例（Mark Dworkin ; 2 月）に関するセミナーを開催した。

(4) 教育研修経験

また、教育経験のための研修として、全国感染症危機管理研修会での講義、地方自治体の感染症危機管理研修会（埼玉県、鹿児島県、新潟県、熊本県、青森県、岩手県、福岡県、秋田県、奈良県）での講義・討論をおこなった。

(5) 感染症疫学研究

平成 15 年度に研修終了した 3 期生および 4 期生が以下の長期プロジェクト研究発表をおこなった。

- ワールドカップ開催時の症候群サーベイランスの評価（鈴木）
- 東南アジア（特にミャンマー）におけるマラリアコントロール（案）（島田）
- 研修医及び医学生における予防接種対象疾患（特に麻疹）の抗体保有状況とその意識調査（逸見）
- 学童における麻疹集団発生予防のための提言（森）
- VRE 院内感染対策にむけての体言（吉田）

(6) 感染症サーベイランス活動

毎週ごとに収集されるサーベイランス報告対象疾患の情報を監視・解析し、必要に応じて地方自治体とともに公衆衛生的介入を実施した。

- 麻疹症例増加に対する予防接種推奨
- 夏季のエンテロウイルス流行時期での注意喚起
- 風疹症例増加に対する予防接種推奨とそれに伴う先天性風疹症候群の対応、等

(7) 感染症情報の還元

感染症サーベイランス、感染症集団発生事例に対する実地疫学調査協力などで得られた情報を病原体検出情報（月報）、感染症週報などを通じて一般住民、公衆衛生従事者などに還元した。また、インフルエンザ流行時期（10 月～3 月）には、一般住民からのインフルエンザに関する問い合わせ、公衆衛生・医療関係者からの SARS に関する問い合わせに対応した。

2. 希少感染症診断技術向上事業に関する業務

平成 15 年度は対象疾患として、ブルセラ、野兔病、Q 熱、レプトスピラ、回帰熱、エキノコックス、深在性真菌症、ボツリヌス、A 型、E 型肝炎、SARS、ウエストナイル熱、天然痘、リッサ、ニパウイルス、高病原性鳥インフルエンザが取り上げられた。

研修会は平成 16 年 2 月、当感染研で 2 日間開催され、56 地研が参加した。それぞれの疾患は細菌 1 部、2 部、獣医科学部、ウイルス 1 部、2 部、3 部、寄生動物部、感染症情報センターの協力により行われた。また、本事業の一環として、レファレンスセンター（カンピロバクター、エンテロウイルス、レジオネラ、寄生虫、アデノウイルス、ジフテリアおよび百日咳、レンサ球菌）の運営が国立衛研、東京都健研センター、ウイルス 2 部、細菌 1 部、2 部、寄生動物部、感染症情報センターおよび各地方衛生研支部の協力でなされた。[稲田敏樹、橋戸円、渡邊治雄（細菌部）]

3. 国立保健医療科学院による特別課程細菌コースの実施

国立保健医療科学院による特別課程細菌コースとして、平成 16 年 1 月 13 日から 2 月 13 日に、感染症研究所村山分室で研修会を行った。本研修は、保健所あるいは地方衛生研究所において細菌検査業務に従事するものを対象として、細菌学の体系的な理解と現状に対応した新しい知識及び技術の習得を目的としている。参加者は、保健所 12 名・地方衛生研究所 17 名・中核市保健所 3 名の合計 32 名であった。本研修は感染症情報センターを初めとして、感染研関連各部室、本省感染症対策課、横浜検疫所輸入食品検査検疫センター、東京都安全健康研究センター、神奈川県衛生研究所、佐賀県唐津保健所、結核研究所、杏林大学、帝京大学、BML 総合研究所、海事検定協会の支援・協力を得て遂行された。[伊藤健一郎、西尾治、古川友子（杏林大学大学院）]

4. 国立保健医療科学院による平成 15 年度特定研修

新興再興感染症技術研修の実施

国立保健医療科学院による平成 15 年度特定研修新興再興感染症技術研修として、平成 15 年 9 月 29 日から 10 月 3 日に感染症研究所村山分室で研修会を実施した。ノロウイルス検査の現状に対応した新しい知識及び技術を習得することを目的とし、地方衛生研究所または保健所でウイルスに関する業務につく 11 名が参加した。[西尾治、伊藤健一郎、杉山和良(バイオセーフティ管理室)、篠原克明(バイオセーフティ管理室)、永田典代(感染病理部)、波多野焜持(感染病理部)、大瀬戸光明(愛媛県立衛生環境研究所)、杉枝正明(静岡県環境衛生科学研究所)、新川奈緒美(鹿児島県環境保健センター)、齋藤美香(群馬県衛生環境研究所)]

VI. 感染症の疫学等の研究

1. ENTER-NET への参加

腸管感染症に関する海外情報のネットワークである ENTER-NET に参加し、ヨーロッパ各国よりファックスおよびインターネットにより得られるサルモネラ、腸管出血性大腸菌 O157 感染事例および菌情報の迅速収集を行うと同時に、同組織に対しては、情報センターで入手したわが国におけるこれらの菌の検出状況の提供を行い、国際情報交換の窓口となった。[小坂健、岡部信彦、渡邊治雄(細菌第一部)]

2. ビブリオバルニフィカスの魚貝類における実態調査

近年問題となっているビブリオバルニフィカス感染症の実態を把握するために 5 つの地研と協力して、毎月、魚貝類におけるビブリオバルニフィカス及び腸炎ビブリオオの定量的なデータを収集し、解析を行った。[小坂健、岡部信彦、田村和満(細菌第一部)、荒川英二(細菌第一部)、山本茂貴(国立医薬品食品衛生研究所)]

3. インフルエンザによる超過死亡の評価

人口動態調査の月別全死因死者数のデータから、「感染研」モデルを用いて、インフルエンザ流行の我が国の人口動態に与える影響を、インフルエンザによる超過死亡を推定し評価した。2000/01 シーズン 913 人、2001/02 シーズン 1,078 人と 2 シーズン連続で少なかったが、2002/03 シーズンは比較的大きな流行を経験し、11,215 人を記録した。2003/04 シーズンは流行の規模は中程度で、超過死亡は 2004 年 2 月までに 2,155 人と再び減少している。2002/03 シーズンまでの結果は、病原微生物情報 vol. 24, No. 11, pp. 8-9, 2003 で情報還元した。[大日康史、重松美加、谷口清州]

4. インフルエンザ関連死亡迅速把握に関する研究

本年度より、さいたま市を加えた 14 大都市から提供されるインフルエンザ関連死亡(インフルエンザ及び肺炎死亡)数を用い、「感染研」モデルと同種の超過死亡推定モデルを適用し、各都市ごとの週単位の超過死亡を推定し、迅速な情報還元を行った。昨年以前のデータのある 13 大都市における死亡の状況は、2 月遅れの人口動態から推計した結果とよく相関し、この情報は、インフルエンザにおける超過死亡の早期警戒に有用であると考えられた。4 年目の本年度は、初めてシーズン中に、かつデータ入手後 3 日以内のウェブによる還元を実現した。[大日康史、重松美加、谷口清州、松岡静香、NEC、厚生労働省健康局結核感染症課、14 大都市・特別区衛生主幹部局]

5. インフルエンザによる患者数の迅速把握(毎日患者報告)事業の解析と還元システムの構築

インフルエンザ定点 5,000 の 1 割弱に相当する約 300 の定点医療機関より、インフルエンザ様症状で受診した患者数を毎日、直接に、インターネットを利用し報告を受けるシステムを構築。この情報をリアルタイムで統計学的処理し、推計罹患患者数を推計したものをウェブ上で提供し、効果的な対策に役立つよう、インフルエンザの流行状況を早期に情報提供した。このデータは、休診日やその前後の影響が非常に強く、そうした曜日効果を排除するアルゴリズムに関して検討を加えた。[小坂健、谷口清州、大日康史、重松美加、松岡静香、数理システム、厚生労働省健康局結核感染症課]

6. 新型インフルエンザのパンデミック対策に関する研究

数理モデルを用いて、新型インフルエンザの被害を予想し、また、それに対する公衆衛生的対応を評価、検討している。具体的には、早期の患者隔離、接触者の自宅隔離、抗インフルエンザウイルス薬の曝露後あるいは曝露前の予防投薬、抗インフルエンザウイルス薬の治療目的での使用に関する優先順位に関する研究を行っている。その成果は、G8 や WHO の会合で報告されている。[大日康史、重松美加、谷口清州]

7. わが国におけるエンテロウイルス重症感染症の疫学研究

厚生科学研究：重症エンテロウイルス脳炎の疫学的ウイルス学的研究ならびに臨床的対策に関する研究(岩崎班)で実施した全国アンケート調査につき集計・解析した。[多屋馨子、北本理恵、早川丘芳、新井智、逸見佳美、大山卓昭、岡部信彦]

感染症情報センター

8. 気管支喘息の発症や喘息症状の増悪に及ぼすウイルス感染の影響と治療の効果に関する研究

厚生科学研究（小田島班）の分担研究3年目としてわが国のヒトメタニューモウイルス感染症に関する疫学調査、インフルエンザの疫学調査を実施した。[佐藤弘、多屋馨子、荒木和子、新井智、岡部信彦]

9. SARS に対する公衆衛生的対応の評価

数理モデルを用いて、2003年5月のSARS事例に対する公衆衛生的対応を、二次感染患者発生の確率分布として評価した。また、仮想的な公衆衛生的対応とその帰結を予想している。その成果は、2003年度公衆衛生学会で報告した。[大日康史、菊池宏幸（大阪大学大学院保健学科）]

10. SARS に対する疫学的対策に関する研究

厚生労働省新興再興感染症研究事業として「SARS 特別研究（主任研究者 吉倉廣）」の分担として、SARS に対する医療機関における対応、一般社会における公衆衛生対応や非流行期におけるガイドラインを策定するために、これまで発表された文献や資料をレビューし、基礎的な検討を行った。また、SARS の再興に備えて、電子サーベイランスシステム（eSARS）を計画、開発した。[岡部信彦、谷口清州、小坂健、重松美加、大日康史、森兼啓太、砂川富正、中島一敏（大分大学）、安井良則（堺市保健所）、大山卓昭、多田有希、木村幹男、多屋馨子、新井智、FETP5期生]

11. 展示動物などからの動物由来感染症感染リスクに関する研究

展示動物から従業員及び来園者に動物由来感染症の感染リスクが存在するか展示施設に対してアンケート調査を実施した。また、感染症流行予測調査事業の結果を基にした日本脳炎ウイルスの侵淫状況の評価を行った。また、感染症発生動向調査報告結果を基にしたエキノコックス症のサーベイランスの評価を実施した。[新井智、多屋馨子、岡部信彦、大山卓昭、中島一敏（大分医科大学微生物学講座、FETPJ）、成島悦雄（東京都上野動物園）、福本幸夫（広島市安佐動物公園長）、高崎智彦（ウイルス一部）、倉根一郎（ウイルス一部）、山田章雄（獣医科学部）]

VII. 予防接種、薬剤等に関連した研究・業務

1. 流行予測調査事業に関する業務

(1) 感染症流行予測調査報告書の作成

感染症流行予測調査報告書の作成：厚生労働省健康局結核感染症課および感染研関係各部と共同で、平成 14

年度(2002年度)報告書を作成した。

(2) 感染症流行予測調査結果速報の発信

平成 15 年度感染症流行予測調査のうち、A) 全国日本脳炎ブタ情報（感染症流行予測調査-速報）を6月10日から11月28日までほぼ毎週（合計16回）速報としてHP上に公開した。B) 全国インフルエンザ抗体保有状況調査速報を10月31日から2月10日まで計3回速報としてHP上に公開した。

(3) 感染症流行予測調査実施要領の作製

厚生労働省健康局結核感染症課と共同で平成 15 年度版を作製した。

(4) 感染症流行予測調査事業 PR 用パンフレット(平成 15 年度版) の作製

各都道府県に配布すると共にHP上に公開した。

(5) オンライン入力システムの改訂、検証

都道府県からの結果送付用のシステムおよび集計システムを改訂、検証した。

(6) 感染症流行予測調査結果をデータバンクに保存した。

(7) 事務局業務

厚生労働省健康局結核感染症課、都道府県、都道府県各衛生研究所、国立感染症研究所各疾患担当部との密接な連携を保つための業務を行った。[多屋馨子、新井智、佐藤弘、早川丘芳、北本理恵、岡部信彦]

2. 血清銀行に関する業務

(1) 血清の保管

感染症流行予測調査事業のため各都道府県において収集された血清の一部を国内血清銀行に受け入れ、保管した。平成 14 年採血分として平成 15 年度に受け入れた血清は、計 3,991 本であった。また、平成 15 年職員血清として計 534 本の血清を受け入れ保管した。

(2) 研究目的での血清の払い出し

3 件の研究に対して払い出し依頼があり、年度内に 2 件の研究に対して計 2,147 本の払い出しを行った。

(3) 血清銀行運営委員会設立（事務局担当）

血清銀行運営委員会を正式に委員会として立ち上げ、事務局担当を行った。血清銀行血清使用申請書を作成した。血清銀行を倫理委員会に申請するための準備を行った。

(4) 保管血清の管理を行った。

[多屋馨子、荒木和子、田中幸江、新井智、早川丘芳、岡部信彦]

3. 予防接種情報公開に関する業務

(1) 感染症情報センターHP 内に日本の予防接種スケジュール 2003 を公開した。

(2) 感染症情報センターHP 予防接種のページを全面

改定した。

- (3) 風疹ワクチンキャンペーンポスターを作成した。
- (4) ワクチン情報(研友企画出版)11月21日号4面:
多屋馨子:風疹 予防接種を受けよう. ワクチン接種率が低い現在の16~24歳. 妊娠初期に感染すると赤ちゃんに悪影響を掲載
- (5) ワクチンインフォメーション(協和企画)依頼原稿
- (6) 日本学校保健研修社月刊「健」編集部「今年の冬流行が予測されるインフルエンザをはじめとした感染症」Q&A 依頼原稿
- (7) 笑顔. 水痘ワクチンに関するQ&A
[多屋馨子、新井 智、松岡静香、岡部信彦]

4. 日本ワクチン学会ニュースレター

ニュースレター事務局業務を行った。著者への連絡、原稿収集、ワクチン関連トピックスを担当し、その原稿を作成した。[多屋馨子、岡部信彦]

5. 予防接種後副反応・健康状況調査検討会

上記委員として、調査解析に参加した。[多屋馨子、岡部信彦]

6. 熱帯病・寄生虫症治療のための国内未承認薬の確保・供給

平成13年度から開始された創薬等ヒューマンサイエンス総合研究事業「熱帯病に対するオーファンドラッグ開発研究」班(主任研究者:大友弘士、その後、名和行文)の主要な活動として、熱帯病や寄生虫症に対する治療薬剤で、国内で認可されていないが必要なものを許可を得て輸入し、全国22ヶ所の保管機関に配付し、それらの機関を通じて薬剤入手を可能にする体制を構築し、運営してきた。そして、これらの国内未承認薬へのアクセスを容易にすることを目的に、研究班のホームページを充実させた。

また、平成15年度には市民公開講座「海外旅行での感染症に対する備え」も開催した。さらには、国内で発生したマラリア患者の詳細を把握し、今後の対策に役立てるために、約1,800の医療機関を対象にしたアンケート調査を実施した。

平成14年度に発行した「寄生虫薬物治療の手引き2003年改訂第5版」については、その後数回にわたり小規模な改訂を行い、これらは研究班のホームページからPDF版でダウンロードできるようにした。[木村幹男]

7. トラベラーズワクチンの実態と必要性・有効性に関する研究

国際医療協力研究委託事業 海外旅行者の健康管理及

び疾病予防に関する研究班(岡部班)の分担研究3年目として、接種の実態の把握、接種後副反応調査、接種後抗体価(A型肝炎、破傷風、狂犬病)の測定について研究した。[多屋馨子、橋本迪子(東京検疫所)、新井智、荒木和子、田中幸江、木村幹男、岡部信彦]

8. 地域における麻疹対策への関与

沖縄はしか"0"プロジェクト委員会への参加、沖縄県具志川市における麻疹対策等に外部委員として積極的に関わっている。[砂川富正]

9. わが国における麻疹の疫学研究

麻疹ワクチン、MMRワクチンの接種率の推移と患者発生に関連した疫学研究を実施した。また、高齢者の抗体保有率に関して、青壮年期、乳幼児期のそれと比較検討した。[多屋馨子、新井智、佐藤弘、荒木和子、北本理恵、早川丘芳、稲松孝思(東京都老人医療センター)、岡部信彦]

10. 風疹・麻疹の抗体調査及び抗体測定方法の比較

医科大学の学生及び附属病院の研修医を対象に、風疹及麻疹に対する抗体の保有状況を調査した。また、風疹は赤血球凝集抑制試験と酵素抗体法、麻疹はゼラチン粒子凝集法と酵素抗体法の抗体測定方法の違いによる成績について比較検討した。[佐藤 弘、多屋馨子、逸見佳美、新井 智、砂川富正、中島一敏、大山卓昭、岡部信彦]

11. インフルエンザワクチン需要予測

インフルエンザワクチンの生産本数を決定するために、世帯調査を実施し、そのコンジョイント分析から予測を行う。特に昨年度は、SARSや鳥インフルエンザの流行という仮想的状況を評価した。[大日康史]

12. 高齢者のインフルエンザ予防接種への公費補助の政策評価

高齢者のインフルエンザ予防接種の公費補助における政策評価をその費用対効果から分析した。具体的には、市町村間での公費補助(自己負担額)の違いから、接種率の違いを説明し、接種率の違いが肺炎あるいはインフルエンザにおける死亡率の違いを説明している。この研究成果は、2003年度 International Conference of Emerging Infectious Diseaseで報告した。[大日康史]

13. 混合ワクチンの品質確保に関する研究

厚生科学研究医薬安全総合研究事業(宮村班)の分担研究1年目として、不活化ポリオワクチンの開発に関して検討した。[多屋馨子、新井智、武田直和(ウイルス第二部)、宮村達男(ウイルス第二部)]

14. ポリオワクチンの効果に関する研究

厚生科学研究新興再興感染症研究事業：ポリオ及び麻疹の現状とその予防接種の効果に関する研究（加藤班）の研究協力者として、ポリオウイルス感受性調査を実施した。[長野秀樹（北海道立衛生研究所）、沖村容子（宮城県保健環境センター）、水田克巳（山形県衛生研究所）、岩井雅恵（富山県衛生研究所）、山下照夫（愛知県衛生研究所）、岡本玲子（山口県環境保健研究センター）、近藤玲子（愛媛県立衛生環境研究所）、多屋馨子、佐藤弘、新井智、北本理恵、早川丘芳、岡部信彦、清水博之（ウイルス第二部）、宮村達男（ウイルス第二部）]

15. 水痘、流行性耳下腺炎、肺炎球菌による肺炎等の

今後の感染症対策に必要な予防接種に関する研究

厚生労働科学研究費補助金新興・再興感染症研究事業（岡部班）の研究の一環として、水痘-帯状疱疹、流行性耳下腺炎に関する基礎、臨床、疫学的研究を実施した。[岡部信彦、多屋馨子、大日康史、砂川富正、中島一敏、多田有希、重松美加、森兼啓太、佐藤弘、新井智、森伸生、荒木和子、安井良則（堺市保健所）、藤井史敏（堺市保健所）、越田理恵（金沢市）金子隆（都立清瀬小児病院）、一戸貞人（千葉県衛生研究所）、齋加志津子（千葉県衛生研究所）]

16. バイオテロ（天然痘）の被害予想と公衆衛生的対応の評価

数理モデルを用いて、バイオテロの被害を予想し、また、それに対する公衆衛生的対応を評価、検討している。具体的には、予防接種の方式として追跡接種か集団接種のどちらが効率的かを、R0および初期曝露者数毎に判断した。その成果は、2004年度感染症学会で報告されている。[大日康史、谷口清州、大久保一郎（筑波大学）]

17. 生物学的製剤に起因する感染症に関する安全性関連情報収集業務

移植片、輸血、タンパク製剤など生物由来の医療関連材料によると考えられる感染症を、早期に把握し、情報提供することにより、健康被害の拡大を防ぐことを目的とした情報収集と、そのためのシステム構築を開始。2000年以降の国内および、2003年以降の海外の文献情報を遡り検索し、関連情報をデータベース化した。2003年9月以降は、報道機関ニュースと、各国および国際的機関の公式情報を毎日、国内外の文献情報を定期的に収集し、生物学的製剤に関連を検討評価し、データベースに蓄積した上で、事務局として、生物学的製剤由来感染症評価検討委員会へ提出し、その調査、対応の緊急性を評価し、関係諸機関へ報告した。[谷口清州、重松美加、多屋馨子、

加藤信子、柴田博子]

18. 国際的動向を踏まえた体外診断薬の品質管理に関する研究

厚生科学研究（竹森班）の研究協力として、風疹の抗体測定調査を実施し、また風疹抗体測定方法について赤血球凝集抑制反応と酵素抗体法の成績を比較検討した。[佐藤 弘、多屋馨子、逸見佳美、大山卓昭、岡部信彦、竹森利忠（免疫部）]

VIII. 病原体の病態および診断に関連した研究

1. 腸管付着性大腸菌

(1) 局在性付着大腸菌の検査法

局在性付着大腸菌の標準的生物活性測定法である FAS 試験を検討した。培養細胞に接種すると菌体の直下に F-アクチンの再集合が起こるが、それを FITC-ファロイジンで染めて観察する。細胞には形態の維持等に F-アクチンが存在していて、それとの鑑別が難点であったが、菌体を DAPI で同時に染色することで判定が容易となった。[伊藤健一郎・岡本その子（栃木県保健環境センター）]

(2) 食品の細菌汚染状況の調査

食品の汚染状況を調べた。漬物に加え、茹で麺、生カキを対象とした。下痢原性大腸菌分離を目的に、生カキ 36 検体を調査した。19 検体 (52.8%) が陽性であった。3 検体が基準（食品衛生法、生食用生カキの規格基準：最確数 230/100 グラム以下）をオーバーしていた。また、セレウス菌分離を目的に、浅漬け 37 検体と麺類 19 検体を調査した。陽性がそれぞれ 8 件 (21.6%) と 6 件 (31.6%) で、分離されたセレウス菌はほとんどがデンカ生研のエンテロトキシンキットで陽性であった。[伊藤健一郎、森屋一雄（佐賀県唐津保健所）]

2. リアルタイム PCR (SmartCycler) による迅速診断法の開発

(1) 赤痢菌

侵入性に関連する *ipaH* 及び *invE* 遺伝子を対象とした。ABI-Prism7000 及び LightCycler でも使用できる。

(2) 大腸菌

耐熱性腸管毒素 *astA* 遺伝子を対象とし。最初に凝集性付着大腸菌から発見され、広く大腸菌に分布していることがわかっている。下痢起因菌としてはまだ明らかではないが、既知の病原因子としてこの遺伝子のみを持つ大腸菌が集団下痢症から分離される事例が経験されている。

(3) ペスト菌

ペスト菌に特異的といわれる 3a 配列を対象とした。[伊藤健一郎、原田誠（横浜検疫所輸入食品検査検疫セン

ター)]

3. ELISA を用いた肺炎球菌抗体価測定法の改良および評価

ELISA 法用いた肺炎球菌抗体測定法の評価および改良を実施した。本 ELISA 法では、ヒト血清をコントロールとして用いるため、ヒトの免疫血清を大量に必要とする。そこで、ヒト以外の動物血清を標準血清として使用できないか検討した。免疫動物としてはウサギを使用し、肺炎球菌ワクチンを接種してその免疫血清をコントロール血清として使用できないか検討した。[新井智、佐藤弘、高橋透(万有製薬)、斉藤剛(BML)、高野昇一(BML)、大石和徳(長崎大学熱帯医学研究所)、岡部信彦]

4. 肺炎球菌臨床分離株の性状解析

呼吸器系基礎疾患を有する患者から分離された肺炎球菌について、血清型の決定および薬剤感受性の測定を行った。[佐藤弘、新井智、永井英明(国立療養所東京病院)、齋藤若奈(国立療養所東京病院)、斉藤剛(BML)、大石和徳(長崎大学熱帯医学研究所)、岡部信彦]

5. ダニ媒介性不明熱疾患の解析

ダニによる刺咬後、熱症状を呈するダニ媒介性不明熱疾患の診断および感染リスクの解析を実施した。対象としては、バベシア原虫、エルリキア、およびその他ダニによって媒介される可能性のある病原体の遺伝子診断の方法を検討した。バベシア原虫、エルリキアについては候補となる遺伝子を特定した。更に、既にダニ媒介性疾患が常在している地域の侵淫状況などを調査した。[新井智、田原研司(島根環境研)、板垣朝夫(島根環境研)、辻正義(酪農大)、石原智明(酪農大)、岡部信彦]

6. アデノウイルス診断法の開発

(PCR 法によるアデノウイルス血清型の同定)

大量のアデノ検体を扱う実験室では、ウイルス分離、同定に時間がかかるため、簡便で感度、精度とも高い検査法の開発が要求される。昨年に引き続き、ヒトアデノウイルス C 亜属ファイバー遺伝子にプライマーを設計し、PCR-制限酵素切断法(REA)およびマルチプレックス PCR 法により血清型同定を試みたところ、全ての血清型が同定できた。

また、難同定の分離株は、それに見合う抗血清が用意されていないか、あるいは中和試験における、ウイルス変異の可能性がある。この際、まずその亜属(種)を決定することは以後の同定作業を進める上で有効である。Xu らの開発した種特異的プライマーを用い、難同定分離株および臨床分離株の血清型の予想を試みたところ、時間やコストの短縮に有用であることが示された。[アディ

カリ アルンクマー、向山淳司、松野重夫、稲田敏樹、岡部信彦]

7. PCR 増幅によるアデノウイルス 40、41 核酸の型分け
乳幼児性急性胃腸炎の原因ウイルスのひとつである、アデノウイルス 40、41 型は分離、同定作業が困難である。迅速診断のために PCR 増幅によるアデノウイルス 40、41 核酸の型分けを検討した。アデノウイルスの中和抗原を担うヘキソン(Hx)、ファイバー(Fib)遺伝子の塩基配列、アミノ酸綴りは 40 型 41 型とも酷似しているがそれぞれ区別可能な領域を見出し、増幅域を決定した。

40 型標準株(Dugan) 41 型標準株(TAK)は Hx、Fib 両遺伝子とも特異的に設定したプライマーで増幅した。

1982 年から 1992 年に日本で分離、同定された 40 型 41 型 20 株では概ね良好な結果になった。一部中和同定と思われる結果と一致しない型、株もみられた。2004 年 ELISA で 40/41 型となった株は培養細胞での分離の有無にかかわらず全て 41 型であった。

[向山淳司、稲田敏樹、A. K. Adhikary、西尾治、岡部信彦(感染研)、北堀吉映(奈良保環研)、大瀬戸光明(愛媛衛研)]

8. 不死化ツパイ腎臓細胞のロタウイルス及びカリシウイルスの感受性

不死化したツパイ(喰虫目、ツパイ科)の腎臓細胞(TK 細胞)に種々のウイルスを感染させ感受性の有無を調べている。下痢症系のウイルスが感染増殖するかどうかを見る目的で、ロタウイルス及びカリシウイルス科アストロウイルスを感染させた。両ウイルス共、感染時にアセチル・トリプシンを加えた。ロタウイルスの細胞変性(CP)は一週間で出現し、坑ロタウイルス抗体を用いた蛍光抗体反応によりロタウイルスの感染増殖が確認できた。アストロウイルスの CP の出現は感染後二週間を要した。五代継代して馴化を試みたが CP 出現までの日数は短縮されなかった。ウイルス材料を希釈すると CP はドーズレスポンスを示した。現在、蛍光抗体法による確認を行っている。[田中幸江、向山淳司]

9. ヒトコロナウイルスの分離同定

三重県における急性胃腸炎の集団発生事例(1997 年)から検出されたコロナウイルスの培養および遺伝子の検出を試みた。[松野重夫、荒木和子、矢野拓弥(三重県科学技術振興センター衛生研究所)]

10. エンテロウイルスの同定法の検討

無菌性髄膜炎および不明発疹症の患者から得られた臨床検体からエンテロウイルスの分離同定および遺伝子診断を行うとともに、エンテロウイルス検出同定法の検討

感染症情報センター

を行った。[荒木和子、小林正明（小林小児科医院）]

11. ノロウイルスの検出法作成

食品およびふん便からの RT-PCR 法、リアルタイム PCR 法によるノロウイルス検査法を改良し、厚生労働省医薬食品局食品安全部監視安全課から全国の衛生研究所等に通知した。[西尾治]

12. 学校等におけるウイルス性集団発生の防止法の確立に関する研究

文部科学省科学研究研究班として、学校で集団発生を起し、社会的に問題となっているノロウイルスの防止策に取り組んだ。[西尾治、藤本嗣人(兵庫県立健康環境科学研究センター)]

13. 乳幼児下痢症の原因ウイルス検出法に関する研究

創薬等ヒューマンサイエンス総合研究事業研究班として、4 種類の下痢症ウイルスを同時に検出できるキットの開発を目的とし、昨年度までに A 群ロタウイルスとアストロウイルスを同時検出するキット構築した。今年度はアストロウイルスとサポウイルス検出のイムノクロマト法の開発を目的とし、アストロウイルスでは診断に用いることができると判断され、サポウイルスは検出の可能性が見出された。[西尾治、大瀬戸光明（愛媛県立衛生環境研究所）、高浜洋一（国際試薬株式会社）、一口毅（国際試薬株式会社）]

14. 食品中の微生物汚染状況の把握と安全性の評価に関する研究

厚生労働省科学研究食品安全確保研究事業研究班として、食品の安全性評価のために、国産市販カキ、輸入魚介類におけるウイルス汚染状況を明らかにし、食品の安全性の確保に努めた。[西尾治]

15. 厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員（乳肉水

産食品部会）の委嘱を国より受けた。[西尾治]

16. 内閣府食品安全委員会専門委員の任命を国より受けた。[西尾治]

IX. 電話、メールによる問い合わせ・メディアへの対応業務

1. 電話、メールによる問い合わせ業務

予防接種、人獣共通感染症、SARS、インフルエンザ、風疹、麻疹、下痢症ウイルス等、その他感染症に関する電話、メールによる問い合わせに対応した。年間の問い合わせ件数は電話約 350 件、メール約 50 件である。[岡部信彦、谷口清洲、重松美加、木村幹夫、多屋馨子、新井智、稲田敏樹、伊藤健一郎、西尾治]

2. メディアへの対応

通常メディアへの対応は、情報センター内において対応者を決め、取材等に応じている。しかし SARS 発生対応時には、多数のメディアからの取材申し込みにより個別の対応は困難となり、1 週間に 1 回定期的にメディアの対する情報の提供、解説、意見交換などを行うことを試みた。感染研の公式見解、公式発表、記者会見とすることではなく、あくまでも感染症情報センターがセンター長を責任者として、感染症としての付加的説明を行うという形式をとり出席希望社（者）にはこの点を了解してもらった上で取材届けを提出してもらった。

SARS が落ち着いた後もこの形式の説明会継続を望む声が多かったため、Risk communication の新たな試みとして、情報センター・メディア感染症情報交換会と仮称して月 1 - 2 回程度の回数で、時に他部の応援を求めながら定期的に行っている。[岡部信彦、情報センタースタッフ一同]

X. 検査実施状況

	行 政	研 究	合 計
ウイルス分離同定	0	1 0 0	1 0 0
核酸・抗原検出	0	7 2 9	7 2 9
血 清 反 応	0	5 8 9	5 8 9
合 計	0	1 4 1 8	1 4 1 8

感染症情報センター

平成 15 年度研究員・研究生

氏 名	身 分	期 間	出 身
中村明子	客員研究員	H9. 4. 1-	東京大学
金澤保	客員研究員	H10. 7. 1-	産業医科大学
樋口薫	協力研究員	H11. 6. 1-	自宅開業
小松崎眞 (元 FETP)	協力研究員	H11. 9. 1-	東京慈恵会医科大学
中瀬克己 (元 FETP)	協力研究員	H11. 9. 1-	岡山市保健所
中島一敏 (元 FETP)	協力研究員	H11. 9. 1-	国立大分医科大学
藤井逸人 (元 FETP)	協力研究員	H11. 9. 1-	京都市役所
加來浩器 (FETP)	協力研究員	H12. 9. 1-	陸上自衛隊衛生学校
松井珠乃 (FETP)	協力研究員	H12. 9. 1-	健康保険天草中央病院
田中毅 (FETP)	協力研究員	H12. 9. 1-	福岡検疫所
鈴木里和 (FETP)	協力研究員	H13. 9. 1-H15. 9. 30	医師
奥村順子	協力研究員	H12. 12. 1-	東京大学
松永泰子	協力研究員	H13. 5. 1-	元職員
藤井達也	協力研究員	H13. 7. 1-	陸上自衛隊
川上桂子	協力研究員	H14. 2. 1-	国立保健医療科学院
安井良則	協力研究員	H14. 3. 1-	大阪府堺市保健所
長谷川斐子	客員研究員	H14. 4. 1-	元職員
逸見佳美	協力研究員	H14. 4. 1-	陸上自衛隊
島田靖	協力研究員	H14. 4. 1-	日本医科大学
吉田英樹	協力研究員	H14. 4. 1-	医師
森伸生	協力研究員	H14. 4. 1-	医師
寺村知子	協力研究員	H14. 7. 1-	京都市衛生公害研究所
斎藤章暢	協力研究員	H14. 7. 1-	埼玉県衛生研究所
Urmila Banik	協力研究員	H14. 10. 1-	チタゴング大学
日谷明裕	協力研究員	H15. 1. 1-	医療法人社団愛友会流山総合病院
佐藤弘	協力研究員	H15. 2. 1-	酪農学園大学
山口卓	協力研究員	H15. 2. 1-H15. 4. 10	(財)日本冷凍食品検査協会
上野久美	協力研究員	H15. 4. 1-	東北大学
上野正裕	協力研究員	H15. 4. 1-	東京医科歯科大学
増田和貴	協力研究員	H15. 4. 1-	東京都健康局
阿部陽子	協力研究員	H15. 10. 1-H16. 3. 31	(財)日本冷凍食品検査協会
加藤由美子	協力研究員	H15. 10. 1-	バイオマトリックス研究所
齋藤利江	協力研究員	H16. 3. 1-	(財)日本冷凍食品検査協会

発表業績一覧

I. 誌上发表

1. 欧文発表

原著

- 1) Urashima M, Shindo N, and Okabe N. : A seasonal model to simulate influenza oscillation in Tokyo. *Jpn J Infect Dis* 56(2):43-47, 2003.
- 2) Urashima M, Shindo N, and Okabe N. : A seasonal models of heparina and hand-foot-mouth disease to simulate annual fluctuations in urban warning in Tokyo. *Jpn J Infect Dis* 56(2):48-53, 2003.
- 3) Kamei K, Sano A, Kikuchi K, Makimura K, Niimi M, Suzuki K, Uehara, Y, Okabe N, Nishimura K and Miyaji M. : The trend of imported mycoses in Japan. *J Inf. Chemother* 2003, 9:16-20.
- 4) Harada S, Kamata Y, Ishii Y, Eda H, Kitamura R, Obayashi M, Ito S, Ban F, Kuranari J, Nakajima H, Kuze T, Hayashi, M, Okabe N, Senpuku H, Miyasaka N, Nakamura Y, Kanegane H, Yanagi K. : Maintenance of serum immunoglobulin G antibodies to EBV nuclear antigen2 in healthy individuals from different age groups in a Japanese population with a high childhood incidence of asymptomatic primary EBV infection. *Clin Diag Lab Immunology* Jan. 2004, P.123-130
- 5) Ohkusa, Y., Honda, C. Horizontal Inequity in Health Care Utilization in Japan. *Health Care Manag Sci* 6 (3); 189-196, 2003
- 6) Honda, C., Ohkusa, Y. Subjective Health Evaluation -Advanced Model and International Comparison-. *J Pop Soc Secur (J J Soc Secur Policy)* 2 (1); 24-31, 2003
<http://www.ipss.go.jp/English/WebJournal.files/SocialSecurity/2003/03jun/HondaOhkusa.pdf>
- 7) Takahashi, H. et al. Nosocomial *Serratia marcescens* Outbreak in Osaka, Japan, From 1999 to 2000. *Infection Control and Hospital Epidemiology* 25(2); 156-161, 2004
- 8) Tze-wai Wong, Chin-kei Lee, Wilson Tam, Joseph Tak-fai Lau, Tak-sun Yu, Siu-fai Lui, Paul K.S. Chan, Yuguo Li, Joseph S. Bresee, Umesh D. Parashar, Joseph J.Y. Sung, Nelson Lee, Jean Kim, Kitty Fung, Albert Ng, Kazutoshi Nakashima, Tomimasa Sunagawa, Keiji Fukuda, Tracee Treadwell, Udo Bucholz, M.K. Tham, Thomas Tsang. Cluster of SARS among Medical Students Exposed to Single Patient, Hong Kong. *EID* (2004) 10(2), 269-76
- 9) Murakami, Y., Hashimoto, S., Taniguchi, K., Osaka, K., Fuchigami, H., Nagai, M. : Evaluation of a method for issuing warnings pre-epidemics and epidemics in Japan by infectious diseases surveillance. *J. Epidemiol.*, 14(2):33-40, 2004.
- 10) Hashimoto, S., Murakami, T., Taniguchi, K., Shindo, N., Osaka, K., Fuchigami, H., Nagai, M. : Annual incidence rate of infectious diseases estimated from sentinel surveillance data in Japan. *J. Epidemiol.*, 13(3):136-141, 2004
- 11) Kano, S., Kimura, M. : Trends in malaria cases in Japan. *Acta Trop.*, 89:271-278, 2004
- 12) Takahashi, H., Suzumura, S., Shirakizawa, F., Wada, N., Tanaka-Taya, K., Arai, S., Okabe, N., Ichikawa, H., Sato, T. An epidemiological study on Japanese autism concerning routine childhood immunization history. *Jpn J Infect Dis*. 2003. 56:114-117
- 13) Arai, S., Tsuji, M., Kaiho, I., Murayama, H., Wei, Q., Okabe, N., Kamiyama, T. and Ishihara, C. Retrospective Seroepidemiological Survey for Human Babesiosis at an Area in Japan Where a Tick-Borne Disease is Endemic. *Journal of Veterinary Medical Science*, 2003. 65:335-340
- 14) Amo K, Tanaka-Taya K, Inagi R, Miyagawa H, Miyoshi H, Okusu I, Sashihara J, Hara J, Nakayama M, Yamanishi K, Okada S. Human herpesvirus 6B infection of the large intestine of patients with diarrhea. *Clin Infect Dis*. 2003, 36(1):120-3
- 15) Adhikary AK., Inada T., Numaga J., Suzuki E., Ushijima H., Banik U., Mukoyama A., Matsuno S., Okabe N., Characterisation of hexon and fiber genes of a novel strain of adenovirus involved in epidemic keratoconjunctivitis. *J.Clin.Pathol.* 57, 95-97; 2004.
- 16) Yae-Jean Kim, Yun-Kyung Kim, Jung-Yun Hong, Eun-Hwa Choi, Hoan-Jong Lee, Toshiki Inada, Madoka Hashido, Pedro A Peidra. Genome type analysis of adenovirus types 3 and 7 isolated during successive outbreaks of lower respiratory tract infections in children. *J. Clin. Microbiol.*, 41:4594-4599, 2003.

- 17) Hirose K, Ito K, Arakawa E, Tamura K, Watanabe H: DNA-based diagnosis method for typhoid fever and paratyphoid fever, and the screening method for *Salmonella enterica* serovar Typhi and serovar Paratyphi A with decreased susceptibility to fluoroquinolones by PCR-restriction fragment length polymorphism(RFLP). *Res Adv Microbiology* 3:109-121, 2003.
- 18) Young-Hee L, Hirose K, Izumiya H, Arakawa E, Takahashi H, Terajima J, Ito K, Tamura K, Sung-Il K, Watanabe H: Multiplex polymerase chain reaction assay for selective detection of *Salmonella enterica* serovar Typhimurium. *Jpn J Infect Dis* 56:151-155, 2003.
- 19) Nishida T, Kimura H, Saitoh M, Shinohara M, Kato M, Fukuda S, Munemura T, Mikami T, Kawamoto A, Akiyama M, Kato Y, Nishi K, Kozawa K, Nishio O: Detection, quantitation, and phylogenetic analysis of noroviruses in Japanese oysters. *Appl Environl Microbiol.* 69(10):5782-5786, 2003
- 20) Yan H, Yagyu F, Okitsu S, Nishio O, Ushijima H : Detection of norovirus (GI, GII), sapovirus and astrovirus in fecal samples using reverse transcription single-round multiplex PCR. *J Virol Methods.* 114:37-44, 2003
- 21) Doan LT, Okitsu S, Nishio O, Pham DT, Nguyen DH, Ushijima H : Epidemiological features of rotavirus infection among hospitalized children with gastroenteritis in Ho Chi Minh City, Vietnam. *J Med Virol.* 69:588-594, 2003
- 22) Hansman GS, Katayama K, Maneekarn N, Peerakome S, Khamrin P, Tonusin S, Okitsu S, Nishio O, Takeda N, Ushijima H : Genetic diversity of Norovirus and Sapovirus in hospitalized infants with sporadic cases of acute gastroenteritis in Chiang Mai, Thailand. *J Clin Microbiol.* 42(3):1305-1307, 2004
- 23) Phan TG, Okame M, Nguyen TA, Maneekarn N, Nishio O, Okitsu S, Ushijima H : Human astrovirus, Norovirus (GI, GII), and Sapovirus infections in Pakistan children with diarrhea. *J Med Virol.* 73:256-261, 2004

その他

- 1) Editorial Committee of Findings of Infectious Agents in Japan: Annual Report on Findings of Infectious Agents in Japan, 1999. *Jpn. J. Infect.*

Dis., 53(Suppl), 2000.

2. 和文発表

原著・総説・解説

- 1) 岡部信彦:重症急性呼吸器症候群. 病原微生物検出情報 24(4):88, 2003.
- 2) 岡部信彦:重症急性呼吸器症候群の現状と対策. 炎症と免疫 11(4):507-514, 2003.
- 3) 岡部信彦:国内外における麻疹の状況. 小児感染症疫 15(1):69-77, 2003.
- 4) 岡部信彦:感染症トピックス-麻疹、インフルエンザ、結核など-. 愛知県小児科医会会報 77:23-28, 2003.
- 5) 岡部信彦:定期予防接種. 内科 91(6):1239, 2003.
- 6) 岡部信彦:バイオテロ対策. 内科 91(6):1243, 2003.
- 7) 岡部信彦:新型肺炎 SARS:その発生から最新動向まで. *Molecular Medicine* 40(8):964-969, 2003.
- 8) 岡部信彦:SARS アウトブレイク. 感染症学会雑誌 77(8):554-562, 2003.
- 9) 岡部信彦:重症急性呼吸器症候群総括. *Infection Control* 12(9):884-888, 2003.
- 10) 岡部信彦:SARS の疫学と予防対策. *日本胸部臨床* 62(9):773-781, 2003.
- 11) 岡部信彦:重症急性呼吸器症候群. *臨床医* 29(10):1828-1829, 2003.
- 12) 岡部信彦:小児における新興再興感染症. *小児外科* 35(11):1309-1313, 2003.
- 13) 岡部信彦:SARS の病態、疫学. *公衆衛生* 67(11):814-819, 2003.
- 14) 岡部信彦:新型インフルエンザ出現の可能性とその予防対策. *日本臨床* 61(11):1904-1908, 2003.
- 15) 岡部信彦:SARS の疫学. *Bio Clinica* 18(11):958-964, 2003.
- 16) 岡部信彦:感染症対策・予防接種の知識. 調剤と情報 9(12):1678-1683, 2003.
- 17) 岡部信彦:麻疹. 感染と消毒 10(1)3-7, 2003.
- 18) 岡部信彦:炭疽菌-国立感染症研究所からの最新情報-. *新潟医学会雑誌* 118(2):105-110, 2004.
- 19) SARS 対策チーム. <速報>本邦における SARS :重症急性呼吸器症候群サーベイランスへの報告例. 病原微生物検出情報 (IASR) 24 (7): 156-159, 2003
- 20) SARS 対策チーム. <速報>本邦における SARS :重症急性呼吸器症候群サーベイランスへの報告例. 感染症ニューズレター-LABEAM 15 (8): 11-13, 2003
- 21) 重松美加、谷口清州、岡部信彦. 日本から見た SARS

- ー重症呼吸器症候群：現状と教訓. ファルマシア 39 (7): 691-696, 2003
- 22) 重松美加、大日康史、岡部信彦. 第5回国際インフルエンザ制圧会議 (International Conference: Options for the Control of Influenza V). 病原微生物検出情報 (IASR) 24 (11): 293-294, 2003
- 23) 重松美加、岡部信彦. SARS とインフルエンザ疫学. 臨床と微生物 31 (1): 59-64, 2004
- 24) 山本茂貴、春日文子、重松美加. カキにおけるノロウイルスのリスクアナリシス. 病原微生物検出情報 (IASR) 24 (12): 319-319, 2003
- 25) 木村幹男、重松美加: 旅行者感染症⑦ 旅行者感染症に関する情報の入手. 医学のあゆみ 206(6/7):434-438, 2003
- 26) 大日康史、重松美加、谷口清州、岡部信彦. インフルエンザ超過死亡「感染研モデル」2002/03 シーズン報告 病原微生物検出情報 (IASR) 24 (11): 288-289, 2003
- 27) 大日康史. QALYあたりの社会負担の上限に関する調査研究. 医療と社会 13 (3): 121-130, 2003
- 28) 大日康史、重松美加、谷口清州、岡部信彦. 肺炎の罹患率・死亡率. 日本医師会雑誌 131 (3): 319-324, 2004
- 29) 森兼啓太. 外科手術部位感染サーベイランスによる治療の質改善. 環境感染 19 (2): 297-300, 2004
- 30) 森兼啓太. ヨーロッパにおける全国的病院感染サーベイランスの現状ーオランダ・ドイツへの訪問を終えて. 環境感染 19 (2): 315-319, 2004
- 31) 森兼啓太. SSI サーベイランス. INFECTION CONTROL 10 (Suppl.): 132-139, 2003
- 32) 森兼啓太. 手術部位感染サーベイランスと対策. INFECTION CONTROL 13 (3): 240-245, 2004
- 33) 松井珠乃ら. 地方衛生研究所におけるツツガムシ病診断の現状ーアンケートによる調査結果と感染症発生動向調査との比較ー. 日本感染症学雑誌 78 (3): 248-52, 2004
- 34) 安井良則、砂川富正、藤岡雅司、奥野良信、木田一裕、福田雅一、岡部信彦. 大阪における麻疹および麻疹予防接種調査結果と麻疹対策. 小児感染免疫. 15(1): 95-102, 2003
- 35) 中島一敏、砂川富正. 香港 SARS 疫学調査の経験. 病原微生物検出情報. 24(10):253-54, 2003
- 36) 砂川富正. 話題の感染症 SARS. 東京小児科医会報. 22(2): 22-26, 2003
- 37) 鈴木里和、砂川富正、大山卓昭、多屋馨子、谷口清州、岡部信彦. インフルエンザ相談ホットラインに基づくインフルエンザの情報提供に関する検討. 感染症学雑誌. 78(2): 99-107, 2004
- 38) 砂川富正. SARS (重症急性呼吸器症候群). 小児科. 45(4): 457-461, 2004
- 39) 谷口清州. グローバル時代の感染症・世界の脅威. 日本臨床 61 増刊2 16-23, 2003.
- 40) 谷口清州. 感染症情報の予防接種への生かし方. 医報フジ 121 11-17, 2003.
- 41) 谷口清州. 無菌性髄膜炎. 総合臨床 52 増刊 970-975, 2003.
- 42) 谷口清州. 無菌性髄膜炎. 臨床検査 47 (3) 313-317, 2003.
- 43) 谷口清州. エボラ出血熱、マールブルグ病、ラッサ熱. 臨床と微生物 31 (1)、3-72045, 2004.
- 44) 谷口清州. 感染症流行情報と臨床での対応. 小児科 45(4): 483-490, 2004.
- 45) 谷口清州. 地球規模での感染症アウトブレイク対応. 感染症 33(5): 188-201, 2003.
- 46) 谷口清州. 本邦におけるインフルエンザの最新動向. 日本臨床 61(11): 1872-1879, 2003.
- 47) 谷口清州. SARS はどこまでわかってきたか. 調剤と情報 9(12): 1668-1672, 2003.
- 48) 谷口清州. 疫学の立場からの SARS について. オペリスク 9(1): 7-10, 2003.
- 49) 谷口清州. 感染症の国内外の動向. 建築整備士 36(3): 37-42, 2004.
- 50) 谷口清州. SARS の疫学状況. 日本小児科学会雑誌 107(10): 1327-1332, 2003.
- 51) 谷口清州. インフルエンザによる健康被害. 最新医学 59(2): 271-276, 2004.
- 52) 谷口清州. ウイルス性脳炎の世界的状況. 化学療法の領域 19(5): 56-60, 2003.
- 53) 村上義孝、橋本修二、谷口清州、小坂 健、瀧上博司、永井正規: 感染症法施行後における感染症発生動向調査の定点配置状況. 日本公衆衛生学雑誌 50(8):732-738, 2003
- 54) 齊藤剛仁、山下和予、岡部信彦: 病原体サーベイランスにおけるムンプスウイルスの検出状況. 小児感染免疫 15:447-452, 2003
- 55) 小坂 健: 新興再興感染症. SARS の教訓. 第3部 再興感染症と注目される感染症. サルモネラ感染症. からだの科学 [増刊]:192-195, 2004
- 56) 小坂 健: ビブリオ・バルニフィカス感染症. 医学のあゆみ 925-926, 2003
- 57) 木村幹男、石井 明: 3 抗生物質・抗菌薬療法の実際/A. 感染症からみた抗生物質・抗菌薬の選択と使用の実際. マラリア. Medical Practice 20 (臨時増刊号): 408-412, 2003

- 58) 木村幹男, 金 惠淑, 綿矢有佑: 話題の抗微生物薬をめぐって. 4 抗原虫薬. マラリア. 臨床と微生物 30:621-630, 2003
- 59) 木村幹男, 重松美加, 小坂 健: 第8回国際旅行医学会議にみる旅行者感染症のトピックス. 臨床と微生物 30:742-745, 2003
- 60) 木村幹男: 「輸入感染症の臨床的アプローチ」. 旅行者感染症に対する国内外における旅行医学的取り組み. 日本臨床寄生虫学会誌 14:23-26, 2003
- 61) 首藤義幸, 三ツ井準一, 濱田篤郎, 木村幹男: 疥癬症患者 22 名のイベルメクチンによる治療経験. 日本臨床寄生虫学会誌 14:104-106, 2003
- 62) 木村幹男, 狩野繁之: 特集 日常病にどう対処しますか?—頻度順に考える症状/疾病の対処法—. その他で比較的多い健康問題の対応(感染症・呼吸器系). 輸入感染症. 治療 86(3月増刊号):1130-1132, 2004
- 63) 春木宏介, 櫻井 裕, 木村幹男: 新興再興感染症. SARS の教訓. 第3部 再興感染症と注目される感染症. マラリア. からだの科学 [増刊]:229-233, 2004
- 64) 木村幹男: 特集「寄生虫病とペット病—新たな認識と実地診療」. 輸入感染症. 日本医師会雑誌 131:1763, 2004
- 65) 木村幹男, 狩野繁之: [蚊が媒介する感染症] 5. 輸入マラリアの現状と治療・予防. 感染症 34:81-91, 2004
- 66) 多田有希: SARS について. 複十字 292:2-3, 2003
- 67) 多田有希: 今冬の SARS 対策. 複十字 294:8, 2003
- 68) 多田有希, 谷口清州, 岡部信彦: 重症急性呼吸器症候群 (SARS) —これまでに得られた知見から—. 小児科 44:1935-1942, 2003
- 69) 多田有希, 大森正子, 伊藤邦彦, 藤生道子: 川崎市の結核対策. 結核 79:17-24, 2004.
- 70) 松山州徳, 多田有希, 岡部信彦, 田代真人, 田口文広: 重症急性呼吸器症候群 (SARS) 材料取り扱いのための WHO バイオセーフティーガイドライン. 臨床検査 48:43-50, 2004
- 71) 多屋馨子. 特集: インフルエンザ Q&A Q29, Q30, Q31, Q32. 診療新社. 編集 岡部信彦. 医報フジ. 2003. 123:29-32, 42-43
- 72) 新井 智, 岡部信彦. 人獣共通感染症総論. 臨床と微生物. 2003. 30(4): 339-344.
- 73) 新井 智, 佐藤 弘, 岡部信彦. 動物・ペットに由来した感染症. 成人病と生活習慣病. 2003. 33(9): 1037-1042.
- 74) 多屋馨子. 抗体保有状況からみたインフルエンザ流行予測. 小児科. 2003. 44(12):1982-1990
- 75) 多屋馨子, 岡部信彦. ワクチンで予防可能な呼吸器感染症. 分子呼吸器病. 2003. 7(5):401-410
- 76) 多屋馨子. インフルエンザを再認識する. 調剤と情報. 2003. 9(12):1674-1677
- 77) 多屋馨子. 感染予防に欠かせないワクチン接種で知っておきたい基礎知識. エキスパートナース. 2003. 19(12):126-129
- 78) 多屋馨子. 話題. 風疹ワクチンキャンペーン: 「昭和54年4月2日〜昭和62年10月1日生まれの方」今年の9月30日までに風疹ワクチンを受けましょう!. 臨床と微生物. 2003. 30(4):408-409
- 79) 多屋馨子. 母子移行免疫の現状. 臨床と微生物. 2003. 30(2):99-104
- 80) 多屋馨子. 疾患各論 4 類感染症(定点把握) 突発性発疹. 総合臨床. 2003. 52 増刊:854-859
- 81) 寺田春郎, 多屋馨子, 宮川広実, 天羽清子, 指原淳志, 砂川富正, 三好洋子, 山本よしこ, 馬場宏一, 今井克美, 永井利三郎, 岡田伸太郎. けいれん性疾患児への予防接種. 小児科臨床. 2003. 56(6):1015-1022
- 82) 多屋馨子, 岡部信彦. 風疹抗体の最新動向とワクチン接種. 日本医事新報. 2003. 4144:17-23
- 83) 石橋道男, 多屋馨子. 小児腎移植とウイルス感染症. ヒトヘルペスウイルス 6 感染症. 今日の移植. 2003. 16(4):386-391
- 84) 岡部信彦, 森伸生, 砂川富正, 多屋馨子, 谷口清州, 中島一敏, 安井良則. 国内外における麻疹の状況. 小児感染免疫. 2003. 15(1):69-77
- 85) 福嶋教偉, 大竹重彰, 澤芳樹, 高橋俊樹, 西村元延, 市川肇, 松宮護郎, 堀口敬, 小野正道, 遠藤誠子, 斎藤美紀子, 白倉良太, 浅利誠司, 多屋馨子, 宮川広美, 松田暉. 当院における心臓移植後の感染症対策. 日本外科感染症研究. 2002. 14:163-168
- 86) 橋戸 円, 岡部信彦. 発生動向調査からみた性感染症の最近の動向. 日本性感染症学雑誌. 15:Suppl:60-68, 2004.
- 87) 西尾治, 西香南子, 福田伸治, 西田知子, 篠原美千代, 三上稔之, 沖村容子, 新川奈緒美, 杉枝正明, 古屋由美子, 大瀬戸光明, 鈴木宏: ウイルス性食中毒の病因、臨床とウイルス, 31:163-170, 2003
- 88) 西尾治: ノロウイルスによる食中毒の発生とその防止について, Kewpie News, 357号, 2003
- 89) 藤本嗣人, 近平雅嗣, 芥川宏, 西尾治: 兵庫県阪神地域における妊婦および0-9歳児のコクサッキーB群ウイルスに対する中和抗体保有状況について、兵庫県立健康環境科学研究所センター年報, 2:103-106, 2003
- 90) 藤本嗣人, 近平雅嗣, 秋山美穂, 西尾治: ノロウイ

ルス検査における RNA 抽出コントロールとしての
エコーウイルス 9 型 Hi11 株の適用について、兵庫
県立健康環境科学研究センター年報、2：107-110、
2003

- 91) 藤本嗣人、近平雅嗣、増田邦義、西尾治、吉田 茂：
日本において一般的に軽症と考えられている手足
口病が、兵庫県において死亡例と後遺症例を含む、
重症中枢神経患者を多発させたケースに関する調
査研究、ひょうごの公衆衛生、18：23-24、2003
- 92) 山上隆也、大屋とし子、中澤美佳子、窪田玲子、望
月町子、大石陽子、嶋村博、秋山美穂、西尾治：最
近 2 年間に小児から検出された下痢症ウイルスに
ついて-A 群ロタウイルスの G 血清型別結果-、山梨
中病年報、30：80-81、2003
- 93) 徳竹由美、中村友香、横内文子、村松紘一、西尾治：
長野県における食中毒集団発生事例からのノロウ
イルスの検索、長野県衛公研報告、26：16-22、2003
- 94) 西田知子、野田衛、三上稔之、篠原美千代、春木孝
祐、大瀬戸光明、加藤由美子、秋山美穂、西尾治：
市販生食用カキのノロウイルス汚染状況、病原微生
物検出情報、24：317、2003
- 95) 杉枝正明、古屋由美子、大瀬戸光明、藤本嗣人、新
川奈緒美、田中俊光、長谷川斐子、秋山美穂、西尾
治：輸入生鮮魚介類におけるノロウイルス汚染状況、
病原微生物検出情報、24：317-318、2003
- 96) 西尾治：ノロウイルス検査法の改訂、食品衛生研究、
54(2)：9-15、2004

書籍

- 1) 岡部信彦、森伸生：日本での急性肝炎の現状-感染症
発生動向調査成績より -ウイルス性肝炎- 第 123
会日本医学会シンポジウム記録集 P.6-12 日本
医学会 2003. 6.
- 2) 岡部信彦：感染症サーベイランス. 小児科研修医ノ
ート P.454-456 編集・五十嵐 隆、渡邊 博、
田原卓浩. 診断と治療社 2003. 4.
- 3) 岡部信彦：予防接種. 研修医の小児医療のための基
礎知識 p.31-39 監修・衛藤義勝 三共株式会社
2003. 6.
- 4) 岡部信彦：新興・再興感染症 ダイナミックメデイ
シン P.17-19-17-20 監修・下条文武、斎藤 康.
西村書店 2003. 8.
- 5) 岡部信彦、森田雅之：抗ウイルス薬の使用上の基本
的事項. 抗微生物薬化学療法 P.122-127 編著・
上田 泰、松本文夫、柴 孝也、森田雅之. ライフ
サイアンス 2003. 9.
- 6) 岡部信彦：健康危機管理における保健所の役割 -
国立感染症研究所感染症情報センターの立場から-
現場から発信する課題解決型の公衆衛生を目指し
て P.87-91 編・第 61 回日本公衆衛生学会総会学
術部会事務局 日本公衆衛生協会 2003. 9.
- 7) 岡部信彦：輸入 (外来) 感染症 小児感染症マニュ
アル P.453-470 編・日本小児感染症学会. 東京
医学社 2003. 11.
- 8) 岡部信彦：学校における感染症対策. 平成 15 年度
学校保健の動向 編・日本学校保健会 P.1-7 日
本学校保健会 2003. 11.
- 9) 岡部信彦：学校における SARS 対策. 平成 15 年度学
校保健の動向 編・日本学校保健会 P.7-13 日
本学校保健会 2003. 11.
- 10) 岡部信彦：感染症の現状、感染症サーベイランス、
感染症ワクチンの現状. 分子予防環境医学
P.139-149 編集・分子予防環境医学研究会 本
の泉社 2003. 12.
- 11) 岡部信彦：輸入感染症 標準感染症学 第 2 版
P.149-164 編集・斎藤 厚、那須 勝、江崎孝行.
医学書院 2004. 3.
- 12) 森兼啓太. 手術部位感染サーベイランス. ICD テ
キスト. ICD 制度協議会 (監修)、ICD テキスト編
集委員会 (編集) メディカ出版 大阪 53-56、
2004.
- 13) 砂川富正、藤井史敏、藤岡雅司、奥野良信、安井良
則。「臨床コアスキル」経験すべき診察法・検査・
手技一予防接種一。40(12)：472-75、2003
- 14) 谷口清州. 生物テロに対するサーベイランスと疫
学調査. 生物化学テロ対処ハンドブック. 診断
と治療社 2003.
- 15) 谷口清州. 感染症対策. 人と健康. 東京化学同
人. 2003.
- 16) 小坂 健, 他：第 5 章 細菌のリスクアセスメント
例“食の安全とリスクアセスメント” 中央法規出
版
- 17) 木村幹男：I 感染症一原虫感染症. マラリア.“外
来診療のすべて” (改訂第 3 版) (高久史磨 総監
修). メジカルビュー社. p969-141, 2003 年
- 18) 木村幹男, 岡部信彦：第 6 章. 主要疾患の現状と予
防対策. 8. 感染症“管理栄養士講座 公衆衛生学”.
建帛社. p130-141, 2003 年
- 19) 木村幹男：第 11 章感染症. Section II. 感染性疾
患の entity. 1. 十分に知っておくべき細菌感染症.
H. リケッチア症. 内科学 (第 2 版, 編集主幹：黒
川 清, 松澤 佑次), 文光堂, p2012-2013, 2003
年
- 20) 木村幹男：第 11 章感染症. Section II. 感染性疾
患の entity. 5. どのような寄生虫感染症が問題か.
A. マラリア. 内科学 (第 2 版, 編集主幹：黒川 清,

感染症情報センター

松澤 佑次), 文光堂, p2077-2080, 2003 年

- 21) 木村幹男: 第 11 章感染症. Section II. 感染性疾患の entity. 5. どのような寄生虫感染症が問題か. K. トリパノソーマ症, リーシュマニア症. 内科学 (第 2 版, 編集主幹: 黒川 清, 松澤 佑次), 文光堂, p2098-2100, 2003 年
- 22) 監修 岡部信彦, 多屋馨子: 予防接種に関する Q&A 集. 社団法人細菌製剤協会 1-81, 2003
- 23) 多屋馨子. 2 類感染症ポリオ. 今日の治療指針私はこう治療している 2003 年版. 総編集 山口徹, 北原光夫. 医学書院 132, 2003
- 24) 多屋馨子. 突発性発疹症. 編集 大関武彦, 古川漸, 横田俊一郎. 医学書院. 今日の小児治療指針第 13 版. 226, 2003
- 25) 国立感染症研究所, 厚生労働省結核感染症課: 病原微生物検出情報 月報 24 巻 4 号-25 巻 3 号, 2003-2004 年
- 26) 予防医学事業中央会: ヒト由来病原体の検出数 (統計のページ). 予防医学ジャーナル 398-409, 2003-2004 年

単行本

- 1) 岡部信彦, 平山宗宏: 予防接種 少年写真新聞社 2003. 9. (改訂)
- 2) 岡部信彦: 感染症 少年写真新聞社 2003. 9. (改訂)
- 3) 竹田美文, 岡部信彦: SARS は何を警告しているのか. 岩波ブックレット No. 606 岩波書店 2003. 10.
- 4) 生物化学テロ対処ハンドブック 生物化学テロ災害対処研究会 (山本 都, 岡部信彦ほか) 診断と治療社 2003. 11.
- 5) 岡部信彦: 動物由来感染症 監修・著 岡部信彦 少年写真出版社 2003. 12.
- 6) 岡部信彦: 学校における感染症の基本的管理体制について 東京私立中学高等学校協会 東京私学教育研究所・学校安全・健康教育研究会 2003. 12.

その他

- 1) 国立感染症研究所 感染症情報センター. 非流行期における SARS 対応のガイドライン. 2003 年 12 月 19 日
<http://idsc.nih.go.jp/others/sars/update99-GL.html>
- 2) 国立感染症研究所 感染症情報センター. 重症急性呼吸器症候群 (SARS) に関する Q&A 「一般向け」・「医療従事者向け」.
<http://idsc.nih.go.jp/others/sars/QA/QAver2.ht>

ml

- 3) 感染症情報センター. 重症急性呼吸器症候群 (SARS) 管理例 (感染症情報センター案 5 訂). 2003/5/22
<http://idsc.nih.go.jp/others/sars/mgmt-05.html>
- 4) 感染症情報センター. 重症急性呼吸器症候群 (SARS) 管理例 (感染症情報センター案 6 訂). 2003/6/10
<http://idsc.nih.go.jp/others/sars/mgmt-06.html>
- 5) 感染症情報センター. 感染防御マスクについて (案). 2003/6/6
<http://idsc.nih.go.jp/others/sars/update73-mask.html>
- 6) 国立感染症研究所 感染症情報センター. 病院の検査室での対応. 2003/7/22
<http://idsc.nih.go.jp/others/sars/update97-room.html>
- 7) 国立感染症研究所 感染症情報センター. 検体材料の輸送. 2003/04/08
<http://idsc.nih.go.jp/others/sars/info/kanri-a-pr7rev.pdf>
- 8) 検査材料の採取・送付に関する追加情報. 2003/04/09
<http://idsc.nih.go.jp/others/sars/info/MailingBox2.4.pdf>
- 9) 国立感染症研究所 感染症情報センター. SARS コロナウイルスに関する検査対応について (5 訂). 2003/12/24 (2004/3/9 更新)
<http://idsc.nih.go.jp/others/sars/update111-ke.html>
- 10) 感染症情報センター. SARS に関する消毒 (三訂版). 2003/12/18
<http://idsc.nih.go.jp/others/sars/sars03w/index.html>
- 11) WHO CDR (著), 国立感染症研究所 感染症情報センター (訳). 重症急性呼吸器症候群 (SARS) の疫学に関する統一見解文書. 2003 年 11 月 (12 月翻訳)
<http://idsc.nih.go.jp/others/sars/update101who.pdf>
- 12) 国立感染症研究所 感染症情報センター. 高病原性鳥インフルエンザが疑われる患者に対する医療機関での対応. 2004/2/10
<http://idsc.nih.go.jp/others/topics/flu/24idsc.html>
- 13) 感染症情報センター. 鳥インフルエンザに関する Q&A. 2004/4/5
<http://idsc.nih.go.jp/others/topics/flu/QA040401.html>

- 14) 感染症情報センター. トリインフルエンザの分布図. 2004/02/02～
<http://idsc.nih.go.jp/others/topics/flu/toriinf-map.html>
 - 15) 感染症情報センター. インフルエンザポスター (カラー&白黒)
<http://idsc.nih.go.jp/others/topics/t-inful/infl-posA3.pdf>
<http://idsc.nih.go.jp/others/topics/t-inful/infl-posBKA3.pdf>
 - 16) 感染症情報センター. インフルエンザ Q&A (平成15年度版). 2004/2/25
<http://idsc.nih.go.jp/others/topics/inf-faq.html>
- ## II. 学会発表
- ### 1. 国際学会
- 1) Shigematsu, M., Osaka, K., Kimura, M., Okabe, N.: Travel and shigellosis from the data of the national infectious disease surveillance of Japan. 8th Conference of the International Society of Travel Medicine. New York, 2003
 - 2) Shigematsu, M., Osaka, K., Taniguchi, K., Okabe, N. Tetanus in elderly : our options. International Conference on Emerging Infectious Disease. Atlanta, February 2004
 - 3) Osaka, K., Shigematsu, M., Okumura, J., Kimura, M. Antibiotic resistance of Shigella spp. isolated from Japanese international travelers. 8th Conference of the International Society of Travel Medicine. New York, May 2003
 - 4) Kasuga, F., Yamamoto, A., Iwahori, J., Vuddhakul, V., Jaroenjiratrakul, W., Kalnawakul, S., Chowdhury, A., Shigematsu, M., Osaka, K., Toyofuku, H., Yamamoto, S., Nishibuchi, M. Quantitative Risk Assessment of Vibrio parahaemolyticus in Bloody Clams in Southern Thailand. IAFP 2003-90th Annual Meeting. Louisiana, August 2003
 - 5) Yamamoto, S., Kasuga, F., Yamamoto, A., Iwahori, J., Vuddhakul, V., W., Kalnawakul, S., Chowdhury, A., Shigematsu, M., Osaka, K., Toyofuku, H., Nishibuchi, M. Quantitative risk assessment of Vibrio parahaemolyticus in bloody clams in Southern Thailand. 天然資源の有効利用に関する日米会議 (U J N R) の有毒微生物部会. Tokyo, November 2003
 - 6) Ohkusa, Y., Taniguchi, K. Pandemic Planning using Mathematical Model at Global Health Security Initiative. Technical Working Group on Influenza Pandemic Preparedness. Geneva, March 2004
 - 7) Ohkusa, Y., Taniguchi, K. Use of Antiviral Drug during a Pandemic-Possible Scenario and Mathematical Modeling. WHO Consultation on priority public health interventions before and during an influenza pandemic. Geneva, March 2004
 - 8) Ohkusa, Y. Policy Evaluation for the Subsidy for Influenza Vaccination in Elderly. International Conference of Emerging Infectious Disease. Atlanta, February 2004
 - 9) Morikane, K. et al. The present status of the epidemiology of surgical site infections in Japan - from the report of the Japanese Nosocomial Infections Surveillance (JNIS) system. The 2nd international congress of the Asian Pacific Society of Infection Control. Singapore, March 2004
 - 10) Yoshimi Hemmi, T. Sunagawa, T. Ohyama, J. Kobayashi, K. Taniguchi, N. Okabe: Enterohemorrhagic Escherichia coli (EHEC) in Japan, 2002. Bi-regional TEPHINET Scientific Conference (Philippines), Nov.2003
 - 11) Mori, N. et al. A Measles Outbreak Investigation among Middle School Students - Japan, 2002. Second SEA and WPR TEPHINET Bi-regional Conference (oral session). Philippines, November 2003
 - 12) Nobuo Mori, K Kaku, T Sunagawa, T Ohyama, K Tanaka-Taya, K Taniguchi, J Kobayashi, N Okabe: Measles Outbreak Investigation Among Middle School Students -Japan, 2002. Bi-regional TEPHINET Scientific Conference (Philippines), Nov.2003
 - 13) Hideki Yoshida, T. Sunagawa, T. Ohyama, J. Kobayashi, K. Taniguchi, N. Okabe: Vancomycin-resistant Enterococcus Nosocomial Infection-Kitakyushu, Japan, 1998-2002. Bi-regional TEPHINET Scientific Conference (Philippines), Nov.2003
 - 14) Yoshida, H. et al. Contact Tracing Of A Laboratory Confirmed SARS Case In Japan. International Conference on Influenza and the

Resurgence of SARS (poster session). Taiwan, October 2003

- 15) Kimura, M., Nawa, Y., Ohtomo, H., Nonaka, A., Ohnishi, K., Kuramoto, M., Ariga, T., Hamada, A., Yamanaka, K., Oana, S.: Successful treatment of amebiasis with intravenous metronidazole. 8th Conference of the International Society of Travel Medicine. New York, 2003
- 16) Kondo, H., Kimura, M., Hamada, A., Namikawa, K., Umemura, S., Okoshi, H., Ori, M., Nishiyama, T., Yamasawa, F., Kanazawa, T., Nakamura, N., Shimada, M., Osaki, M.: The Japanese Society of Travel and Health: six years experiences and future perspectives. 8th Conference of the International Society of Travel Medicine. New York, 2003

2. 国内学会

- 1) 重松美加, 小坂健, 岡部信彦. 保育園・幼稚園における出血性大腸菌感染症の関する研究. 第 77 回日本感染症学会総会. 2003 年 4 月、福岡
- 2) 重松美加. SARS 問題に取り組んで・ミニシンポジウム「海外渡航と SARS」. 第 7 回海外渡航者の健康を考える会大会・第 1 回海外渡航者健康学会学術集会. 2003 年 7 月、大阪
- 3) 小坂健, 田村和満, 春日文子, 斉藤紀行, 尾畑浩魅, 甲斐明美, 山井志朗, 浅井良夫, 杉山寛治, 西尾智祐, 福島博, 宮坂次郎, 荒川英二, 重松美加, 岡部信彦, 山本茂貴. 魚貝類及び環境における *Vibrio vulnificus* の定量的な解析に関する研究. 第 77 回日本感染症学会総会. 2003 年 4 月、福岡
- 4) 大日康史. 予防接種の経済効果. 第 7 回ワクチン学会(招待講演). 2003 年 10 月、名古屋
- 5) 菊池宏幸, 大日康史. 数理モデルを用いた SARS 対策の評価 第 73 回日本感染症学会西日本地方会総会. 2003 年 11 月、鹿児島
- 6) 森兼啓太. 病院感染サーベイランスとは?—手術部位感染サーベイランスを中心に. 第 2 回帝京大学医学部付属病院院内感染予防講習会(講演). 2004 年 2 月、東京
- 7) 森兼啓太. 手術部位感染サーベイランス—その理想とは. 第 19 回日本環境感染学会総会(ワークショップ). 2004 年 2 月、横浜
- 8) 森兼啓太. SSI サーベイランスの導入とフィードバックデータの活用. 第 3 回 SSI サーベイランス研究会(パネルディスカッション・司会). 2004 年 2 月、横浜
- 9) 森兼啓太. 院内感染対策のあり方. 函館五稜郭病院院内感染対策講習会(講演). 2004 年 3 月、函館
- 10) 森伸生ら. 2002 年茨城県で起こった 2 つの中学校での麻疹集団発生の比較. 第 35 回日本小児感染症学会総会(口演). 2003 年 11 月、富山
- 11) 吉田英樹ら. 細菌性赤痢国内発生事例の疫学的検討. 第 77 回日本感染症学会総会(口演). 2003 年 4 月、福岡
- 12) 砂川富正. 現地報告—香港における SARS 疫学調査の経験—. 第 62 回日本公衆衛生学会総会感染症フォーラム、2003 年 10 月
- 13) 砂川富正. 今日の新興・再興感染症と対応について. 第 50 回日本化学療法東日本支部会・第 52 回日本感染症学会地方会・第 86 回日本細菌学会関東支部会(合同学術集会)、2003 年 10 月
- 14) 谷口清州. 重症急性呼吸器症候群の疫学状況. 第 106 回日本小児科学会学術集会. 2003 年 4 月、福岡市.
- 15) 谷口清州. SARS の疫学状況. 第二回医薬品等ウイルス安全性研究会. 2003 年 5 月、東京.
- 16) 谷口清州. SARS の疫学. 第 44 回日本臨床細胞学会. 2003 年 5 月、東京.
- 17) 谷口清州. SARS の疫学と今冬の対策. 第 24 回衛生微生物技術協議会. 2003 年 7 月、福岡市.
- 18) 谷口清州. SARS の疫学と今冬の対策. 第 129 回三重県小児科医会. 2003 年 9 月、津市.
- 19) 谷口清州. SARS の疫学と今後の流行予測. 第 7 回日本ワクチン学会. 2003 年 10 月、名古屋市.
- 20) 谷口清州. 感染症に対するグローバルな対応. 東日本化学療法・感染症・細菌学合同会議. 2003 年 10 月、横浜市.
- 21) 谷口清州. 人獣共通感染症のサーベイランスと対策. 人と動物の共通感染症研究会. 2003 年 11 月、東京.
- 22) 谷口清州. SARS とはなにか. 第 43 回栃木県総合医学会. 2003 年 11 月、宇都宮市
- 23) 谷口清州. SARS に対する世界での対応経験. 第 31 回日本救急医学会総会. 2003 年 11 月、東京.
- 24) 谷口清州. 感染症に対するグローバルな対応—SARS を中心に—. 第 56 回三重県公衆衛生学会. 2004 年 1 月、上野市.
- 25) 谷口清州. 感染症情報センターにおける SARS 対応. 第 17 回公衆衛生情報協議会. 2004 年 1 月、長崎市.
- 26) K. Taniguchi. Infectious disease surveillance and control in Japan. 日本小児科学会日中韓小児医学フォーラム. 2004 年 2 月、東京.
- 27) 谷口清州. SARS—今までにわかってきたこと—. 第 124 回日本薬学会. 2004 年 3 月、大阪市.

- 28) 木村幹男：シンポジウム「輸入感染症の臨床的アプローチ」。旅行者感染症に対する国内外における旅行医学的取り組み。第14回日本臨床寄生虫学会2003年
- 29) 首藤義幸, 三ツ井準一, 濱田篤郎, 木村幹男：疥癬患者24名のイベルメクチンによる治療経験。第14回日本臨床寄生虫学会2003年
- 30) 木村幹男：シンポジウム「旅行時の発熱性疾患」。発熱旅行者の診断アルゴリズム。第7回海外渡航者の健康を考える会2003年
- 31) 川上桂子, 木村幹男, 橋本迪子, 青木和子, 浜田 勝, 谷畑健生：日本人海外渡航予定者のマラリアに関する意識。第1回海外渡航者健康学会2003年
- 32) 木村幹男, 川上桂子, 浜田 勝：日本人海外渡航者のマラリア・スタンバイ治療の実態。第1回海外渡航者健康学会2003年
- 33) 大友弘土, 木村幹男, 吉川晃司, 水野泰孝, 柴 孝也：2001-2002年におけるマラリア治療概況。第52回日本感染症学会東日本地方会総会2003年
- 34) 金 惠淑, 大黒千佳子, 綿矢有佑, 木村幹男：マイクロタイタープレートハイブリダイゼーション法によるマラリアのDNA診断。第44回日本熱帯医学会・第18回日本国際保健医療学会2003年
- 35) 木村幹男, 川上桂子, 浜田 勝：日本人海外渡航者におけるマラリア・スタンバイ治療の現状。第59回日本寄生虫学会西日本支部大会2003年
- 36) 金 惠淑, 奥田洋平, 木村幹男, 綿矢有佑：熱帯熱マラリア原虫におけるメフロキン耐性化機構の解析。第59回日本寄生虫学会西日本支部大会2003年
- 37) 木村幹男：シンポジウム「海外赴任者の健康管理」。予防接種, マラリア予防。日本総合検診医学会第32回大会2004年
- 38) 多屋馨子, 稲松孝思, 岡部信彦。高齢者における麻疹抗体保有状況。第3回抗体測定研究会。東京都。2003年2月
- 39) 多屋馨子。わが国の麻疹の現状と麻疹ワクチン接種状況について。第12回東日本外来小児科学研究会。神奈川県横浜市。2003年3月
- 40) 斉藤剛, 永井英明, 新井 智, 岡部信彦, 高野昇一。肺炎球菌莢膜多糖体特異的抗体のELISA法による定量。第76回日本細菌学会総会。熊本県熊本市。2003年4月。
- 41) 多屋馨子, 新井智, 岡部信彦。2002/03シーズン前の抗体保有状況からみたインフルエンザ(flu)流行予測。第106回日本小児科学会学術集会。福岡県福岡市。2003年4月
- 42) 森伸生, 砂川富正, 多屋馨子, 谷口清州, 岡部信彦。宮崎県都城・北諸地域での麻疹流行時の小中学生における麻疹ワ
- 43) クチン接種状況の調査(2003年)、第106回日本小児科学会学術集会。福岡県福岡市。2003年4月
- 44) 新井 智, 高崎智彦, 森 伸生, 多屋馨子, 早川丘芳, 倉根一郎, 岡部信彦。1982年から2002年までの日本脳炎患者発生状況。第44回日本臨床ウイルス学会。鹿児島県鹿児島市。2003年6月。
- 45) 多屋馨子, 稲松孝思, 早川丘芳, 新井 智, 岡部信彦。わが国の高齢者における麻疹抗体保有状況。第44回日本臨床ウイルス学会。鹿児島県鹿児島市。2003年6月
- 46) 多屋馨子。SARS感染症最新情報。第2回関西感染症フォーラム(FinD in Kansai)。大阪府大阪市。2003年6月
- 47) 多屋馨子。ワクチン情報最前線〜日常診療に役立つワクチン情報〜。小児感染症懇話会。大阪府大阪市。2003年7月
- 48) 多屋馨子。予防接種・感染症をめぐる最近の動向〜SARSの現況も含めて〜。三沢臨床懇話会学術講演会。青森県三沢市。2003年9月
- 49) 多屋馨子。ヘルペスの迅速診断について。第7回多摩ウイルス感染症研究会。東京都。2003年9月
- 50) 多屋馨子。『ワクチン情報最前線』〜診療に役立つワクチン情報〜。第5回横浜小児感染症懇話会。神奈川県横浜市。2003年9月
- 51) 多屋馨子。Severe Acute Respiratory Syndrome 重症急性呼吸器症候群(SARS)最新情報。第6回高知県感染症研究会。高知県高知市。2003年9月
- 52) 佐藤 弘, 永井 英明, 斉藤 剛, 新井 智, 多屋 馨子, 大石 和徳, 岡部 信彦。慢性呼吸器疾患患者から分離された肺炎球菌の性状。第52回日本感染症学会東日本地方会。神奈川県横浜市。2003年10月
- 53) 新井 智, 多屋馨子, 高崎智彦, 辻正義, 石原智明, 倉根一郎, 岡部信彦。日本脳炎ウイルス非構造タンパク質NS1の発現。第51回日本ウイルス学会学術集会・総会。京都府京都市。2003年10月
- 54) 新井 智, 中島一敏, 大山卓昭, 多田有希, 藤井逸人, 成島悦雄, 福本幸夫, 安藤正樹, 吉川徹, 岸本寿男, 川中正憲, 中嶋建介, 山田章雄, 岡部信彦。動物展示施設における人と動物の共通感染症対策ガイドラインについて。第136回日本獣医学会学術集会。青森県青森市。2003年10月。
- 55) 多屋馨子。小児腎移植とウイルス感染症〜HHV-6(ヒトヘルペスウイルス6)感染症〜。第7回京滋ヘルペス研究会。京都府京都市。2003年10月。
- 56) 新井 智, 高崎智彦, 多屋馨子, 早川丘芳, 倉根一

- 郎、岡部信彦、感染症流行予測調査事業担当者. 近年の日本脳炎患者発生状況および感染リスク. 第3回人と動物の共通感染症研究会. 東京都. 2003年11月.
- 57) dhikary Arun Kumar, Inada Toshiki, Banik Urmila, Mukouyama Atshushi, Matsuno Shigeo, Araki Kazuko, Numaga Jiro, Suzuki Eiko, Okitsu Shouko, Ushijima Hiroshi, Okabe Nobuhiko ; Heterogeneous fiber of subgenus Cadenoviruses and fiber application in genotyping. 第51回日本ウイルス学会学術集会(京都)2004年
- 58) 古川友子、伊藤健一郎他:病原血清型大腸菌の eae、tir、cesT 遺伝子多型. 第76回日本細菌学会総会. 奈良、2003. 4.
- 59) 伊豫田淳、伊藤健一郎他:LEE 遺伝子群非保有型志賀毒素産生性大腸菌に存在する病原性遺伝子の解析型. 第76回日本細菌学会総会. 奈良、2003. 4.
- 60) 新川奈緒美、秋山美穂、西尾治: 吐物による感染が推察された Norovirus 集団胃腸炎事例、第44回臨床ウイルス学会、2003年6月26-27日、鹿児島
- 61) 杉枝正明、新川奈緒美、大瀬戸光明、西尾治: Norovirus 感染により排泄されるウイルス量について、第44回臨床ウイルス学会、2003年6月26-27日、鹿児島
- 62) 森伸生、砂川富正、多屋馨子、谷口清州、西尾治、岡部信彦: 2002年に感染症発生動向調査へ報告されたA型肝炎のまとめ、第44回臨床ウイルス学会、2003年6月26-27日、鹿児島
- 63) 藤本嗣人、近平正嗣、西尾治: コクサッキーB群ウイルスに対する小児および妊婦の抗体保有調査、第44回臨床ウイルス学会、2003年6月26-27日、鹿児島
- 64) 野田衛、西尾治、国井悦子、藤井彰人、池田義文、平崎和孝、荻野武雄: 市販カキにおけるノロウイルスの定量的汚染調査、全国公衆衛生獣医師協議会平成15年度調査研究発表会、2003年9月5日、東京
- 65) 入谷展弘、久保英幸、勢戸祥介、春木孝祐、西尾治、武田直和、村上司、簗城昇次、改田厚、綾田稔、小倉壽: 平成14年度に検出された Norwalk virus のプローブ型別および遺伝子型別、平成15年度地方衛生研究所全国協議会近畿支部ウイルス部会総会、2003年9月
- 66) 徳竹由美、中村友香、横内文子、村松紘一、西尾治: Norovirus が検出された非発症従事者の糞便中ウイルス量、第18回地研全国協議会 関東甲信静支部ウイルス研究部会、2003年9月
- 67) 顔海念、柳生文宏、沖津祥子、西尾治、牛島廣治: 下痢症ウイルスの迅速診断法の開発—RT-multiplex PCR法を用いた糞便検体からのノロウイルス(GI, GII)、サポウイルス、アストロウイルスの同時検出、第51回日本ウイルス学会、2003年10月27-29日、京都
- 68) 新川奈緒美、吉澄志磨、福田伸治、西香南子、杉枝正明、古屋由美子、三上稔之、西田知子、牛島廣治、秋山美穂、岡部信彦、西尾治: 全国各地で発生したノロウイルス(NV)による食中毒事例について、第51回日本ウイルス学会、2003年10月27-29日、京都
- 69) 西田知子、野田衛、三上稔之、篠原美千代、春木孝祐、大瀬戸光明、秋山美穂、西尾治: 市販生食用カキのノロウイルスおよびA型肝炎ウイルス汚染状況、第51回日本ウイルス学会、2003年10月27-29日、京都
- 70) 西香南子、福田伸治、篠原美千代、大瀬戸光明、植木洋、西尾治: カキ及び養殖海域のNV汚染調査とカキ筏における水平垂直分布調査、第51回日本ウイルス学会、2003年10月27-29日、京都
- 71) 勢戸祥介、入谷展弘、久保英幸、改田厚、春木孝祐、西尾治、綾田稔、小倉壽: 平成14年度に大阪市で検出された Norwalk virus の遺伝子型別、第51回日本ウイルス学会、2003年10月27-29日、京都
- 72) 杉枝正明、古屋由美子、大瀬戸光明、藤本嗣人、新川奈緒美、田中俊光、山口卓、長谷川斐子、西尾治: 輸入生鮮魚介類におけるウイルス汚染状況について、第51回日本ウイルス学会、2003年10月27-29日、京都
- 73) 藤本嗣人、近平雅嗣、西尾治、岡藤輝夫、岡藤隆夫: 平成15年に兵庫県で発生した過去10年間で最大規模の咽頭結膜熱の流行時におけるウイルス検索結果および臨床現場におけるアデノウイルス迅速診断キットの有効性に関する検討、平成15年度兵庫県公衆衛生協会中央研究会、2003年、神戸
- 74) 西香南子、山内昭則、杉山明、中山治、西尾治: 2002/2003 シーズンに三重県で検出された Norovirus の解析、第24回日本食品微生物学会学術総会、2003年、岡山
- 75) 新川奈緒美、伊東祐治、西尾治、他: ノロウイルスによる食中毒と乳幼児下痢症の発生及び海域汚染について、第45回鹿児島県公衆衛生学会、2003年、鹿児島